

『留学交流』

2018年 2月号

特集

日本人学生の海外留学促進



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

『留学交流』

2018年 2月号 目次

特集 日本人学生の海外留学促進

- 【論考】** 1
- ブリテン諸島の日本人大学院留学生にみる異文化間友人関係形成
Cross-Cultural Friendship Formation of Japanese International Graduate Students in British Isles
岡山大学大学院社会文化科学研究科 鉄川 大健
TETSUKAWA Hirokatsu
(Graduate School of Humanity and Social Science, Okayama University)
岡山大学大学院社会文化科学研究科 田中 共子
TANAKA Tomoko
(Graduate School of Humanity and Social Science, Okayama University)
- 【事例紹介】** 18
- 『青山学院大学地球社会共生学部』の挑戦 -東南アジア半期留学必須の試み-
The Aim of the School of Global Studies and Collaboration: Attempting Mandatory Single-Semester Study Abroad in Southeast Asia
青山学院大学地球社会共生学部学部長 平澤 典男
HIRASAWA Norio
(Dean Professor; School of Global Studies and Collaboration, Aoyama Gakuin University)
- 【事例紹介】** 26
- グローバル化時代と大学の海外感染症危機管理
-学校医が経験した2014年エボラウイルス病アウトブレイク-
Risk Management of International Infectious Diseases in the Globalization Era at a University: Experience of 2014 Ebola Virus Epidemic as a School Doctor
慶應義塾大学保健管理センター副所長 横山 裕一
YOKOYAMA Hirokazu
(Deputy Director, Health Center, Keio University)
- 【海外の教育事情】** 34
- 韓国における留学生送り出しの現況 -2010年代以降を中心に-
The Current Status of the Korean Students Studying Overseas: Focusing on the 2010s
畿央大学教育学部・准教授 石川 裕之
ISHIKAWA Hiroyuki
(Associate Professor, Faculty of Education, Kio University)
- 【海外留学レポート】** 43
- 私のアナザースカイ -スイス、ベルン-
My Another Sky: Switzerland, Bern
慶應義塾大学 神谷 真由
KAMIYA Mayu (Keio University)
- 【日本留学レポート】** 51
- 日本での外国人の生活
My Quick Half a Year in Japan
山口大学元交換留学生 ジーギマンタス・マチュルスカス
Zygimantas Maciulskas (Ex-exchange student, Yamaguchi University)

【論考】

ブリテン諸島の日本人大学院留学生にみる 異文化間友人関係形成

Cross-Cultural Friendship Formation of Japanese International Graduate Students in British Isles

岡山大学大学院社会文化科学研究科 鉄川 大健

TETSUKAWA Hirokatsu

(Graduate School of Humanity and Social Science, Okayama University)

岡山大学大学院社会文化科学研究科 田中 共子

TANAKA Tomoko

(Graduate School of Humanity and Social Science, Okayama University)

キーワード：異文化間友人関係形成、認知行動的ソーシャルスキル、海外留学

序論

留学生にとって、留学することには様々なメリットが存在するが、同時にそれは困難な体験でもある。そのため、滞在国でいかに異文化適応を果たしていくのかは、留学生にとって大きな課題となっている。田中(2000)は、現地の人（以下、ホスト）との対人関係形成は留学生の適応課題の1つであるが、一方でその関係形成自体が適応の有効な手がかりにもなると述べている。また、Ward & Kennedy(1999)は、ホストとの異文化における良質な対人接触が、留学生の社会文化的適応を促進する可能性を示唆している。異文化における対人関係形成は、こうした観点からみれば異文化適応の基盤といってもよいだろう。本研究では、対人関係の中でも滞在国（以下、ホスト国）で学ぶ学生や同世代の人々との関わりを特に重視する立場から、留学時の異文化間友人関係に焦点を当てる。

異文化間友人関係については、異文化適応を促進する機能が注目される。高濱・田中(2009)は、友人関係形成が適応方略の獲得を促すとし、園田(2011)は、異文化での友人関係の構築が異文化適応の要因になりうることを示した。留学生の友人関係形成の背景にある要因としては、コミュニケーション能力や友人との肯定的体験の共有などが議論されている(工藤, 2003; 小松, 2013)。だが異文化間

友人関係を形成する方略や、具体的なプロセスを解明しようとした研究は少ない。これらの問いを解こうとすることは、異文化圏での良好な友人関係形成を促し、異文化適応を促進するための教育的試みの道を拓くことに繋がる。良好な友人関係形成が構築され、速やかに異文化適応が実現されていくなれば、滞在先での充実した学生生活を後押しすることができ、豊かな国際交流の実現にも繋がっていくと思われる。

英語圏は日本人学生の留学先として注目が高い。イギリスとアイルランドを含む欧州ブリテン諸島は、英語圏の国であり、特にイギリスは、日本学生支援機構(2017)によると、在籍大学の協定に基づかない日本人留学生数が、アメリカ、オーストラリア、カナダに次ぐ第4位と多い。大学院留学は学位取得のため留学期間が長期にわたり、現地に根付いた生活をする必要があるため、現地で対人関係をじっくり形成していくことの意義は高い。そこで今回は、欧州ブリテン諸島（イギリス及びアイルランド）に所在する大学院への留学経験者の協力を得て、その友人関係形成に焦点を当てた。

本研究の目的は、日本人留学生の異文化間友人関係形成をめぐる、彼らがホスト国で友人関係を形成するために、どのような対人行動を実践しているのかを調べることにある。

方法

研究協力者 欧州ブリテン諸島にある大学院への留学経験を持つ日本人女性3名(年齢25~35歳)を対象に、半構造化面接を行った。留学先の国はイギリス及びアイルランドであり、留学期間は12~54か月である。調査時点では帰国後1~2年が経過していた。Table 1に研究協力者のデモグラフィック情報を示す¹。

Table 1 研究協力者のデモグラフィック情報

研究協力者	年齢	留学国	留学期間	帰国時期	居住スタイル	所属校
A	32	イギリス	42か月	X-3年	フラットシェア	語学学校 + 大学院
B	25	イギリス	12か月	X-2年	フラットシェア	大学院
C	34	アイルランド	54か月	X-2年5か月	ホームステイ → フラットシェア	語学学校 + 大学院

面接調査 以下に示す、筆者の設定した留学中の友人関係に関する6つの質問を軸に、半構造化面接を行った。平均面接時間は、67分41秒 ($SD=15$ 分04秒)であった。

- ① 留学前、留学時の自分についてどのような考えを持っていましたか。
- ② 現地に元々知人がいましたか。現地の人と関わりを持つ機会がありましたか。

¹ 表内、帰国時期のXは面接時の年数を示す。

² SD (標準偏差) : 分散の正の平方根であり、平均からの偏りを示す値である。

③現地の友人とどのようにして知り合いましたか。現地の友人を作ることに関し、どのような考えを持ち、どのような行動をしましたか。

④現地の友人と関係が続けたり、深めたりする中で、どのような行動が理解しにくかったですか。現地の人の理解できない行動に対し、どのような考えを持ち、どのような対処をしましたか。

⑤日本での友人関係と現地での友人関係を比べた時、どのような点で差異を感じますか。同じ点はありますか。

⑥現地での良好な友人関係を築き、保つための心がけや工夫はありますか。

分析 面接時の音声データから逐語録を作成した後、大谷(2008, 2011)の開発した SCAT³(Steps for Coding and Theorization)に基づいて、4つのコーディングステップによる質的データ分析を行った。

手続き 初めに研究協力者に対し、研究内容の概略と倫理的配慮に関する説明を行い、研究協力の承諾が得られた後で、同意書に署名してもらい、半構造化面接を実施した。面接時には、研究協力者の許可を得て IC レコーダーにより語りを録音した。

結果

SCAT による分析の結果、欧州圏への留学生の語りは『留学前の予測』、『困難への直面』、『留学動機・目的』、『差異の認知』、『友人観に基づく友人選択』、『友人関係』の大きく6つのテーマから構成されると考えられた。以下では、SCAT によって得られた結果として、テーマを『 』、サブテーマを「 」、カテゴリを【 」、サブカテゴリを[]で示し、サブカテゴリの詳細を《 》で示す。斜体の文は面接における研究協力者の発言、()内は筆者による補足、< >内は筆者の発言である。なお方言は標準語に直し、固有名詞は記号化するなど、プライバシー保護の観点から表記を調整した。

1. 留学前の予測

異文化間友人関係に関する『留学前の予測』として、C氏は漠然とした【コミュニケーション不安】を語っていた。しかし、A氏は【留学前の友人関係不安】など様々な不安を抱える反面、【事前留学経験に基づくコミュニケーションの楽観的認知】がみられた。またB氏は対人関係以外の不安は感じていたものの、【留学前の対人不安はない】としていた。以下に、各々の語りを示す。

【コミュニケーション不安】

ちゃんと先生の指導についていけるか。語学的な面もありましたね。<語学の中にも読んだり、書いたり、話したり、聞いたりってのもあるんですかね?>そうです。全部です。(C氏)

³ SCAT: 面接内の語りから逐語録を作成し、それぞれの語りから、①データ内の注目すべき語句を抽出、②その語句(①)のいいかえを記述、③それらを説明するような語りの外の概念の記述、④これまでのステップで浮き上がったテーマ・構成概念の記述、の4つのステップでコーディングを行い、記述されたすべてのテーマをつなげたストーリーラインを作成し、そこから理論化する手続きからなる分析方法である。大谷(2008, 2011)を参照。

【事前留学経験に基づくコミュニケーションの楽観的認知】【留学前の友人関係不安】

馴染めるかどうかはちょっと不安、でもあまり人見知りしない、すごく仲の良い友達ができるかって不安はそこまで期待してなく、生活上コミュニケーションをとるくらいはできるかな。(A氏)

【留学前の対人的不安のなさ】

行ってみないとわからない部分があったんで、(人間関係の)これが不安とかそういう感じはなかったです。(B氏)

2. 困難への直面

異文化間友人関係に関する『困難への直面』は、【困難の経験】と【困難への対処】という2つのカテゴリから構成されていた。【困難の経験】には、困難状況の原因帰属が内向的な[スキル不足]や[言語理解的困難]などに加えて、原因帰属が外向的な[ホスト集団の排他的態度]や[外国人コミュニティでの不快感]などが含まれていた。さらに、困難に直面することにより不適応状態を呈した[知識不足による授業内友人関係への不適応]、[留学後期の社会的不適応]などが含まれていた。【困難への対処】には、問題を直視していく問題焦点的な[外国人の理解できない行動の取り入れ]⁴対処や、気持ちの安定を図る情動焦点的な[趣味によるストレス解消]対処があり、さらに、回避的な[日本人感覚の投影的合理化によるイベント不参加]や[経済的ゆとりのなさによるイベント不開催]が含まれていた。以下にこれらの例を示していく。

【困難の経験】

ビジネスを分かる体で授業のグループワークをされると、お金の話とか分からないんで。ちょっと苦労しましたね。(B氏, [知識不足による授業内友人関係への不適応])

【困難への対処】

牛乳とか買ってて、私今日牛乳使わないといけないものがあって帰ってきたのに、あれ、牛乳ない、って言ったら、あー、飲んだ、みたい。今度買ってくるから、って。私は今日必要だったのに、っていうのも、ま、いいかみたい。その代り私も同じようにしても、何も思わないんだ、ってのがわかるから。そうか、じゃあ、良いかって思えたら、それもオッケー。(A氏, [外国人の理解できない行動の取り入れ])

夜ごはんが違う。夜ごはん食べに行こうよとか、パーティこの時間からやるからとか言われて行くと、日本人はたいてい7時とか8時とかに夜ごはん食べるんですけど、ヨーロッパでは10時くらいから食べ始めるんで。だから、そんなに遅い時間にパーティに出たら、明日授業出れないなって言うのもあったし。(中略)夜9時くらいからご飯食べようといわれても出かける気が起きなかったですね。

⁴ 行動の取り入れ：他者の理解できない行動を、自分も同じようにしても良いんだ、と思い自分もその行動を行うようになることを示す。他者の行動を自分の行動に取り入れることを示す。

日本人の感覚で言ったら、そんな時間から食べたら胃もたれするとかあるんで。(B氏, [日本人感覚の投影的合理化によるイベント不参加])⁵。

3. 留学動機・目的

異文化間友人関係に関する『留学動機・目的』について、C氏を例に説明する。C氏は留学初期には【学業達成留学動機】や【友人関係動機への主体性の弱さ】などがみられ、留学の動機や目的の中に友人関係形成の比重はそれほど大きくなかった。しかし、留学が進むにつれ、[飲みニケーション]などの【友人関係形成動機の高い他の留学生の使用する関係開始方略】の実践をし、最終的には【友人関係形成動機に基づく努力】をするようになった。

【学業達成留学】【友人関係動機への主体性の弱さ】

別に、この人と何が何でも友達になってやるって思って関わるわけではないので、あまり意識はしていないですけど。

デパートメントであう人はやっぱり勉強しに来ているんで、お互いに、確認し合って、困ってることがあれば手伝い合う感じで。(C氏)

【友人関係形成動機の高い他の留学生の使用する関係開始方略】【友人関係形成動機に基づく努力】

友達を作ることも留学の目的の1つとして考える人は、それが良いとっかかりになると思いますね。ガッツがあれば。こっちから、飲みいかない?って言ってみたりとか、あと、すごく気を使ってくれる人ばっかしだったんで、みんな優しいなって思うところが多くて、見習わないとなと思いましたね。

相手を尊重すれば向こうも尊重してくれるとか。仲良くなろうと努力すれば、ある程度それは伝わるとか。(C氏)

4. 差異の認知

異文化間友人関係をめぐる『差異の認知』は、【日本文化の特有性】、【日本とホスト国の比較】、【日本人と外国人の比較】という3つのカテゴリから構成されていた。【日本文化の特有性】には、謙遜や遠慮などの[表現理解の文化的差異]、【日本とホスト国の比較】には、コミュニティ間の出入りに関する[期間限定滞在者とホストコミュニティの分離]、【日本人と外国人の比較】には、他国留学生等との文化的差異を示す[日本人と外国人の共有に関する認識の差異]が含まれる。

【日本文化の特有性】

D(専門分野)に行きたいと思ってても、Dの勉強何もしてなかったし。てなったら、日本人やったら、遠慮するじゃん。で、そうなる謙遜するから。そしたら、向こうからすると何もない人みたい

⁵ 投影的合理化：SCATによる分析により生成された語句であり、自分の受け入れられない不都合な状況を日本人全般の考えだと思い込み、それを正当化することを指している。

なことと一緒にいるから、何も言えなくなる。それでも、つてのは向こうは何も言ってくれないから。

(A氏, [表現理解の文化的差異])

【日本とホスト国の比較】

イギリス人の塊は、留学生からしたらハードルが高くて、まず話してることが何話してるか分からない。イギリス過ぎて。訛りもあるし、早すぎるし、ネガティブだし。そういう部分で入りづらい。あと、外のものがあまり好きじゃないので、あまりこっちから行ってもウェルカムな感じでは受け入れてくれない。その塊がばらけたら、1人1人はすごく良い人なんですけど、固まってしまうとちょっと今は止めておこうと。個人個人だと関わりやすいですけど、イギリス人で固まられちゃうとやめておこうとなりますね。(B氏, [期間限定滞在者とホストコミュニティの分離])

【日本人と外国人の比較】

果物とかも置いとくけど、全部部屋に入れとくのもあれだからさ、だから、置いとくと、食べて良いつても聞かずに、普通に食べてるからね。で、食べてたら、今度自分が買い物行ったときに買ったけばいい、って感じの人が多いから。でも、日本人って、やっぱり一人暮らしって感覚があるから、そこまで自分のものを勝手に触られたりとか、勝手にされるの嫌、たぶん。でも外国人からしたらそこまで。お前今バナナ食べなくても死なないやろみたいな、ごめんねとは言うけど、そこまで深刻に考えてないっていうような人がいたりする。(中略) 塩とか、トイレトペーパーとか、洗剤とかも、誰かが買ってきて、使って、無くなったら、この間は誰か買ってきたから、今回は自分が買おうかなみたいな。だからルーティーンだね。特に調味料とかはそうゆう感じ。だから、それが見てたら、わかるよね。日本人なら、この人も塩持ってるし、この人も塩持ってるし、この人も塩持ってるし、同じ塩でも。でも外国人はそれ一個にしたら良いみたいな。だから、これみんな使おうねってのが増えていく、外国人の場合。でも、日本人の家行くと、いつの誰のみたいなのは共有スペースには置いてあるけど、みんな結構自分でも持ってるみたいな。(A氏, [日本人と外国人の共有に関する認識の差異])

5. 友人観に基づく友人選択

異文化間友人関係に関する『友人観に基づく友人選択』には、【友人観に基づく友人関係形成選択】と【希薄な友人観】が含まれていた。

【友人観に基づく友人関係形成選択】

クラスメイトに関しては、この授業のあの話題どう思うとか、そういう話ができるし、みんな同じような関心事があって集まった人たちだから、授業以外の部分でも盛り上がるし、良いんですけど、別にクラブとか行ってチャライ感じの人たちに出会う必要性は感じなかったですね。でっかい音楽がバンバンなって、みんながお酒あおってるような環境もそんなに好きじゃないし。(B氏)

【希薄な友人観】

流動的やね、私。大学の時は大学の友達でいるけど、今はもう、大学の時の友達も、自分からあんまり連絡したりしないかな。(中略) そんなに連絡することもないからまず、用事も。〈留学中は?〉まあまあ一緒。(A氏)

6. 友人関係

最後の『友人関係』は、5つのサブテーマから構成されており、それぞれ「ホストとの異文化間友人関係」、「他国留学生との異文化間友人関係」、「日本人留学生との友人関係」、「ホスト国生活者との異文化間友人関係」、「全般的異文化間友人関係」であった。なお留学中の友人の構成を語りから読み取ると、A氏は【他国留学生>日本人留学生>ホスト】と、他国留学生の友人が最も多く、次に日本人留学生、最も少ないのはホストであった。B氏は【日本人留学生=他国留学生>ホスト】と、日本人留学生と他国留学生は同程度の友人が存在したが、ホスト友人は最も少なかった。C氏は【ホスト>日本人留学生>他国留学生】とホスト友人が最も多く、次いで日本人留学生、最も少ないのは他国留学生の友人となっていた。

「ホストとの異文化間友人関係」 「ホストとの異文化間友人関係」には、6つのカテゴリが含まれていた。【ホストの対日本人態度】には、[友好的態度]と[非友好的態度]があり、後者では《排他的態度》へ対処である《明確な自己呈示による態度変化》について語られていた。加えて、[行動様式の妥協的取り入れ]や[ホスト性格の受容と取り入れ]などの【ホストの行動模倣】があった。【ホストとの関与機会】に関しては、[ホストとの関与機会の少なさ]や[ホストとの関与機会の少なさへの無関心]など、ホストと関わる機会に関するネガティブな語りが目立った。それから、【ホストとの関係形成利益】として[困らないための情報]などが出現していた。【対ホスト異文化間友人関係形成スキル】には、《時間共有》などの[関係維持のための行動スキル]や、《自己呈示》などの[関係形成のための行動スキル]がみられた。一方で、【対ホスト異文化間友人関係不形成スキル】として、[阻害要因としてのホスト文化的職場の回避]などが見出された。

【ホストの対日本人態度】

こっちがある程度ちゃんと勉強して、最低限話せるとか、なんか知ってるとか、専門があったりとか、そうすると、向こうはちゃんとそういう対応をしてくれる。でも、わかりません、外国から来たんで、ははは、って言う人には、表面的には、うんうんって笑ってるけど、対応はすごく馬鹿にするよねっていう感じはある。(A氏、《排他的態度》)

何でもいから、専門というか、私はこういう人間ですってということとか、何を学んで、何をしてとか、何ができるとか、何をやってきたみたいなのを、ちゃんとすぐ出せるようにしといたら、逆にびっくりするくらい違う対応、ちゃんとリスペクトな対応で。あれ?って言うくらい。じゃあ、今度

からこれで行こう、みたいな。(A氏, 《明確な自己呈示による態度変化》)

【ホストの行動模倣】

この時間に集合ねとか言っても、集合時間にやっと支度が終わる。だいぶ遅れてくる。3か月くらいしてから、この時間からパーティやりますとか言われて、その30分後くらいに行くようにしました。どうせみんな来ないんで。遅れてやっとちょうどいい。(B氏, [行動様式の妥協的取り入れ])

【関与機会】

あっちにイギリス人があまりいた覚えがなくて、もちろん現地に住んでる人もいるんですけど、大学自体にイギリス人がそんなにいない。〈残念では?〉残念とかはなかったですけど、イギリス人こんなにいないものなのか、とは思いましたね。〈関わりたいとは?〉それは特になかったですかね。(B氏, [ホストとの関与機会の少なさ]、[ホストとの関与機会の少なさへの無関心])

【ホストとの関係形成利益】

現地の人は、イギリスではこうだからとか、みんなどう?みたいな。電車の乗り方とか、バスも乗れるし、どこどこ行こうってなって、バスは、これを買って、お金ここに入れて、ピッてしてとか。こういうところで食べたら高いよとか、こういうところはぼったくるから気を付けてねとか。(A氏, [困らないための情報])

【対ホスト異文化間友人関係形成スキル】

(イギリス人の友人)3人くらいは、よく休み時間とか。あと一緒にやる課題とかあったんですよ。それを一緒にしたりですね。女の子が1人いて、あとは男の子でした。親友は難しい。(A氏, 《授業外時間・授業課題遂行時間共有》)

「他国留学生との異文化間友人関係」 「他国留学生との異文化間友人関係」には、4つのカテゴリが含まれていた。[紹介者としての仲介者]と[スーパーバイザーとしての仲介者]からなる【他国留学生仲介者】がいた。そして[困った時の共感的理解]や[必要な生活術共有]など、【他国留学生との関係形成利益】が得られていた。【他国留学生との接近欲求】には、[接近欲求]と[留学生との関係満足]などが含まれていた。【対他国留学生異文化間友人関係形成スキル】には、《年齢的近接性》、《環境的類似性》、《会話の類似点》、《時間共有》などの類似点や共通点を見出すことなどから成る、[関係形成のための行動スキル]、そして《受動的イベント参加》や《飲みニケーション》などの[関係開始のための行動スキル]から構成されていた。

【他国留学生仲介者】

友達ができたのは本当にF国の子のおかげなので、その子がいなかったら、結構厳しかったかもなって思いますね。結構短期留学の子が多いとこだったんで、外国の人ってなったら、どうしても、すぐ帰っちゃうんでしょってなって、現地の学生はなかなか仲良くなろうとしない傾向があるって、F国

の子も言っていたんで。だから、F国の子も、深く関わる友達を作るのに苦労したから、入れてくれたってのもあって。(C氏, [紹介者としての仲介者])

すごい心配そうな顔してたと思います。だから、慣れるまでは、F国の子とかが、大丈夫、ジョークだよってこっそり言ってくれたりしてました。(C氏, [スーパーバイザーとしての仲介者])

【他国留学生との関係形成利益】

そこに住んでる普通のイギリス人とかなら、普通に契約するんですけど、契約もできないんですよ、留学生は。どこに住んでるとか、何年住んでるとか、そういうのがないとばっくれるので、契約自体してくれないんですよ。だから、どうしたら携帯が持てるとか、みんなどうしてるのって聞いたら、みんなプリペイドで。そんな感じで、とりあえず行ってみて、安いのあったみたい。やったーみたいな。(A氏, [必要な生活術共有])

【他国留学生との接近欲求】

<現地の友人は作りたいとは思わない?>なんか別にどうしても白人が好きってのはなかったし、そんなに必要というか、クラスメイトにヨーロッパの人もいっぱいいたので、改めてそういう風には思わなかったですね。(B氏, [留学生との関係満足])

【対他国留学生異文化間友人関係形成スキル】

G国人の女性で、年齢も近くて、1個(才)か2個(才)しか変わらなくて、彼女の方が上なんですけど。年齢が近かったのと、彼女もそんなに働いた経験がない、インターンで働いたことがあるくらいで、ほとんど私と同じような環境から来ていたので、話も合うし、一緒に遊びに行くことも多かったし。グループワークとかも一緒にやってたんで、彼女は今でも連絡とるくらい仲良かったです。(B氏, [関係形成のための行動スキル])

月に1回くらい語学学校の生徒と先生も一緒にやるアクティビティみたいなのあるじゃないですか。みんなで、クラブ行こうとか、みんなでどこどこ行こうとか、みんなで飲み行こうとか。それに最初の方はあんまり興味なかったんですけど、でもやっぱりちょっとは仲良くなった方がいいから、たまに暇なときは行ってたんですよ。で、それ行くと、やっぱりグンッと仲良くなりますよね。そんなに仲良くないのに、喋らないのに、お酒飲むとか、酔うとか、ふと気づいたら、かなり友達みたいな雰囲気になる時あるじゃないですか。(A氏, [関係開始のための行動スキル])

「日本人留学生との友人関係」 「日本人留学生との友人関係」には、6つカテゴリが含まれていた。日本人との関わりを避ける【日本人留学生回避欲求】を語る者もいれば、[現地日本人コミュニティ参加]や[日本人留学生との接近欲求]などの【文化依存的親和欲求】があるため、【関係開始の容易性】を感じる者も多かった。また、困った時にはすぐに頼ることができる【日本人仲介者】の存在もあった。そして、ホスト国では[関係形成スキル日本人ネットワーク形成]や[自文化優位的職場への接

近]などの【対日本人友人関係形成スキル】があり、そのことにより《非外国感》を感じていた。一方で、[過度な遠慮による友人関係形成困難]という【対日本人友人関係不形成スキル】が存在していた。

【日本人留学生回避欲求】

日本人同士で固まっていたわけではないので、日本人とアジア人と、アジアで固まってることが多かったですね。実際いつも一緒にいた友達はG国とH国の子でしたね。(B氏)

【文化依存的親和欲求】

2軒隣の日本人の方に日本人学校のアルバイトを紹介していただいて、その先生方とは学校帰りに飲みに行ったりしましたけど。(C氏, [現地日本人コミュニティ参加])

あと、I国生まれの40歳くらいのJ(日本的な名前)っていうI国人がいましたね。絶対日本人やと思ったら、単に名前がJっていう。(中略)お父さんが日本が大好きなI国人で、子供にJってつけただけ。私はその人が日本人やと思って探してたんですよ。でも、誰も日本人いないなって。あれーおかしいなって思ってた、JはI国人だったっていう。(A氏, [日本人留学生との接近欲求])

【関係開始の容易性】

初めはやっぱり、同じクラスの子で、特に日本人がいたら、言葉も通じるし、向こうも同じ経験をしてきてるので、次これが大変とか、これやったとか。(中略)日本人だっていうだけで、第一関門突破で。そんなに親しくなかったはずなのに、何でも聞くじゃないですか。(A氏, [日本人アイデンティティ]、[日本人との親密化])

【日本人仲介者】

最悪、知り合いも1人いるので、相談できる相手。その子も、イギリスに行っていたので、なんとなく物価とか事情とか私より知っていたので、相談できる相手がいたので、心強いというか。(A氏, [スーパーバイザーとしての仲介者])

【対日本人友人関係形成スキル】

G国とH国の子たちは日本人の輪の中に入ってきていたので。もちろん会話は英語ですけど。(B氏, 《日本人ネットワークの形成》)

現地のイギリス人しか雇ってないようなお店はダメだなと思って。で、近くに、歩いて10分以内のところに、大きなKっていうショッピングセンターができたんですよ。そこにL(日本企業)が入ってたんですよ。日本人いるじゃないですか。交渉できる相手は日本人じゃないですか。(A氏, 《自文化優位的職場への接近》)

「ホスト国生活者との異文化間友人関係」 「ホスト国生活者との異文化間友人関係」は、【ホスト国生活者との関係形成利益】と【対ホスト国生活者友人関係形成スキル】の2つのカテゴリからなり、主にA氏の語りに見られた。【ホスト国生活者との関係形成利益】は、生活していく上で困らないため

の情報を提供されることによって、[リスク未然防止]や[社会的困難の軽減]がはかられる、という内容である。【対ホスト国生活者友人関係形成スキル】には、ホスト国生活者を主体的に支援する《日本文化的表情認知の教授的支援》など、[関係形成のための行動スキル]や、加えて彼らと関係を形成するときの考え方である《返報性》や《対等性保持》など、[関係形成のための認知スキル]が含まれていた。

【ホスト国生活者との関係形成利益】

生活していく上では、こっちの方（現地で生活している人）が役に立った。留学生は、同じ経験をしてきて、同じ失敗をしてきてるけど、もう一方は、失敗をしない方法を知ってるから、ここに住んでるから。（中略）留学生だけだったら、みんなでワーワー言っただけで、仕方ない、そういう世界もあるよって終わってたけど。そういう時にはやっぱりこっちの方（現地に生活している人）が役に立つ。（中略）なんか（問題が）あった時自分が不利になるとかいうことも知らずに、これがイギリスだと思って生活してるわけで。でも、それをこっちに言ったら、それ絶対やめた方がいいよって、あ、そーなんだ、何て言ったらいいの？って。そういう正規のルートを一応教えてくれる。そういう時には、こっちも知っとかないと、痛い目見るといふか。（A氏、[リスク未然防止]、[社会的困難の軽減]）

【対ホスト国生活者友人関係形成スキル】

L企業なんで、日本の企業じゃないですか。だから、タグとかに日本語とかがついてると働きに来てる人も、〇〇これ何書いてんの？って聞いてくれる。向こうも聞きたいことあるし、だからこっちも聞きやすい。マネージャーが日本人で、一番怖い人が日本人だったんで、マネージャー今怒ってんの？とかそういう情報交換ができて、タイタイ（トントン）だったんですよ。でもね、大学院やとね、教えてもらうとかなると、圧倒的に向こうから教えてもらうことが多くなるので、距離感が難しい。やっぱりタイタイ（トントン）の方がいいじゃないですか。（A氏、《日本文化的表情認知の教授的支援》、《返報性》、《対等性保持》）

「全般的異文化間友人関係」 「全般的異文化間友人関係」は、大きく分けて4つのカテゴリによって構成されていた。大学院という環境の中で、様々な友人と関わるうちに【友人への劣等感】を感じ、【異文化での友人関係形成利益】を感じる者がいた。また、【異文化での友人関係形成スキル】及び【異文化での友人関係不形成スキル】では、友人関係の開始・維持・発展・拡大・形成・継続に資する行動スキル・認知スキルが含まれ、以下を含む数多くの事例が述べられた。

【友人への劣等感】【異文化での友人関係形成利益】

年齢が違ったので、向こうのマスター（修士課程）って、1回働いて仕事を辞めてきてる人がすごく多くて、大学からストレートで大学行ってる人はすごく少なくて、大人の中に子供が混ざってる感じでしたね。社会を経験した人がたくさんいたので、そういう中において、知らないことだらけだなんて

思いましたね。(B氏)

【異文化での友人関係形成スキル】

習い事を途中から始めて、そこで自分でも友達を作りました。(C氏, 《主体的な友人関係形成》)

私の得意なことが相談を受けることなので、相談の聞き役になることがすごく得意で、そういうぐちゃぐちゃな人間関係について話を、いろいろ話をしていくうちに、この人話を聞いてくれる人ってのが伝わっていて、いろんな相談をされるようになったので、そういう意味で(得意分野を使う)。(C氏, 《受動性による得意分野の自己呈示》)

お寿司とか。みんな持ち合うか、お金徴収するかだから、そんな負担にはならないし。みんな片づけて帰ってくれるし。いくら(払う)みたいな感じが、作った料理とか飲み物を持ってくるとか。だから、メインの御飯だけ作っとけば、飲み物とデザートはもってきてくれる。(中略)たまには(パーティを)開かないとダメ。開きたくなくても。あのりに会いたいな、このりに会いたいな、そのりとも会いたいなってなった時、このりのパーティ行ったらいいけど、あのりとそのりには会えない。そういう時に開いたら、一番いい、みんなに会えるから。(A氏, 《イベントでの自文化浸出的呈示》《友人関係ネットワーク構成員のメンテナンス》)

【異文化での友人関係不形成スキル】

元々英語そんなに得意ではなくて、勉強してそのあと遊びに行っ、また次の授業に話がつながれるのかっていったら、私の場合そうじゃないので。ちゃんと勉強はしないと、しかも高いお金親に払ってもらっているんで勉強はしないとと思っていたので。なんで、勉強時間に重点を置いて生活をしていたところもあるので。もちろん遊びに行くときは行っていましたが、遊ぶための友達はいなくていいかなと。(B氏, 《学業的留学動機による娯楽的關係回避》)

パーティとか呼ばれたら行くけど、長居もしないし、夜遅いから帰り道嫌だしってのもありましたね。(B氏, 《受動的イベント参加》、《短時間イベント参加》、《治安不安》)

22,3(オ)の子ばかりのグループに30くらいの外国人が来て、ここで話してることも、もちろん言葉も早いし、喋ってる中にいて、まあでもいさせてもらってるけど、でも、笑ったときに、それ何?って解説聞くのも悪いし、でも、そこがわかるまで、私の英語力はないし、向こうも逆に大丈夫?ってなることに気使うかなってなるから、そこにいるけど、理解できないことのほうが多かった。イギリス人が来て、理解できなくなったら、やっぱりなんか距離感ありますよね。何回もわからないわからないって言うのもだし。だからある程度流して。(A氏, 《親密關係性困難》)

なお、Table 2に分析による抽出された異文化間友人関係形成スキル及び不形成スキルを示す。

Table 2 分析により抽出された異文化間友人関係形成スキル

テーマ (サブテーマ)	カテゴリ	サブカテゴリ	サブカテゴリの詳細	
留学前の予測	肯定	肯定的予期	語学、学術	
		日常生活への適応的認知		
		楽観的認知	日常生活、学業、事前留学経験に基づく学業・語学・コミュニケーション	
	否定	不安のなさ	留学前の対人的不安のなさ、留学前の全般的不安のなさ	
		否定的予期	環境	
		覚悟	環境・食事	
	不安	留学前の友人関係・コミュニケーション・学術・金策・生活困窮・経済的不安、留学初期の生活困窮		
	留学の実感のなさ			
困難への直面	経験	不快感情	現地への嫌悪感、外国人コミュニティでの不快感、生活困窮解消のための努力による不快感情	
		困難感	ホストとの普遍的友人関係形成・友人関係発展、コミュニケーション、他国留学生との友人関係維持、個人特性の差異実感、留学時の対人交流、アクセント、言語、言語理解、環境	
		偏見	冷遇、排除	
		困難回避欲求	衣食住、経済	
		不適応	知識不足による授業内友人関係、社会	
			文化共通の友人関係形成スキルの不足	
			友人相互作用における利益の限界	
	対処	努力	語学力不安をカバーする試行錯誤	
			生活困窮解消のための努力	情報収集、我武者羅な努力
		消極的対処	言語理解困難への対処	日本文化的遠慮
			非経済的関係維持方略の不使用	電話
			日常生活への困難感	学校、既知友人
			外国人の理解できない行動	取り入れ、楽観性
			語学力不足	講義録音、先生>生徒
	ストレス解消	趣味		
留学動機・目的	内発的動機	新規性追求、達成		
	学業達成動機			
	友人関係動機	主体性の弱さ		
		友人関係形成動機の高い留学生の友人関係開始方略		
	友人関係形成動機に基づく努力	得意分野の自己呈示、関係形成利点の自己呈示		
差異の認知	日本とホスト国の比較	文化的行動様式の対比		
		集団	集団凝集性の差異、集団の在り方の違い、期間限定滞在者コミュニティとホストコミュニティの分離	
		差異の発見	人種の差異を楽しむ、就職行動の文化的ギャップ経験	
		共通点の発見	かわり方、礼儀、察し	
		慣れない食習慣	自己犠牲的対処、体得の諦め、自炊制限、金銭的余裕のなさ	
	日本文化の特有性	日本人コミュニティ	非排除志向性	
		対人交流方略の理解	遠慮、謙遜	
日本と他国の比較	対人関係	年齢的文化差、経験的文化差		
	認識の差異	共有感覚、在留資格		
友人観に基づく友人選択	友人選択	目標のある人>ワイワイしている人、効率性、気が合うかどうか、授業関連話題、同一関心事、仲良くなりたいかどうか、ホストの人種的区別		
	関係性による行動選択	友人観に基づく友人との普遍的関係と特定の関係		
	希薄な友人観	日本での親友関係の少なさ 希薄な友人観に基づく日本とホストの同質的友人関係の実感		
友人関係形成	友人関係(全般)	友人への劣等感		
		友人関係形成の利益	語学、年齢超越的友人関係による日本での職場への容易な適応、職業関連情報収集、相互援助	
	友人関係形成	関係開始	侵襲性の低い自己呈示、飲みニケーション、積極的関与、受動的関与、挨拶、文化特有趣味の開始、情報交換、初期イベント、自己呈示、授業時間共有、スモールチャット、日本文化呈示、初期の能動的会話、中期の受動的会話、イベント参加、実直な性格、友人選択	

		関係維持	察する力、飲みニケーション、メール、直接会話、語学力、定期的日常会話、イベント主催、イベントへの誘い、サーカズム（ジョーク）、ネットワークのメンテナンス、行動の自然な取り入れ、イベントの工夫、初期の能動的会話、中期の受動的会話、非侵襲的傾聴、旅行、非浸出的日本文化呈示、	
		関係発展	紹介者としての仲介者、イベントへの誘い、イベント参加、サーカズム（ジョーク）、行動模倣、友人の新しい側面の発見	
		関係形成	機会	大学院、大学院よりも語学学校
			形成	返報性、快感情の自己呈示、気を引く自己呈示、得意分野の自己呈示、スモールチャット、挨拶、自文化の浸出的呈示、対等性の保持、主体性、イベントの誘い、友好的関わり、行動模倣、行動の変換的取り入れ、偏見を持たない
			不形成	夕食やパーティの時間的相違、性格的友人選択、経済的ゆとりへのなさ、治安的不安、日本人感覚の投影的合理化、学業的留学動機、娯楽的関係回避、単独行動、関係形成回避性格、受動的イベント参加、イベントの中途退室、過剰配慮、コミュニケーション不良、親友関係の諦め
		関係拡大	積極的イベント参加、イベント主催、紹介者としての仲介者	
関係継続	語学力、定期的日常会話としての挨拶			
友人関係 (ホスト)	ホストの友好的態度	日本文化への肯定的感情、自己呈示・自己開示によるホスト態度の友好的変化、ホスト個人の良好な人間性、ホストの優しさ		
	ホストの非友好的態度	排他的態度、ホスト行動のルーズさ		
	関与機会	職場＞学校、大学の授業、単独受講、近所、仲介者づて、ホストよりも留学生との関与機会の多さ		
	関係形成利益	日常生活方法、困らないための情報		
	友人関係形成スキル	維持	授業外・授業課題の遂行時間共有	
		形成	自己呈示、自己開示、ホスト行動様式の妥協的取り入れ対処、ホストのルーズな性格の受容、ホストのルーズな性質の取り入れ	
	友人関係不形成スキル	発展	ホストとの疎遠な関係	
		形成	ホスト同士の集団化、ホストコミュニティの排他的態度、留学生アイデンティティの見下し、親密関係性困難、ホスト行動のルーズさ、ホストとの関与機会の少なさへの無関心、ホストとの関与機会の少なさによる非積極的関与、言語的困難、	
継続		ホストとの疎遠な関係		
友人関係 (他国)	仲介者	紹介者としての仲介者、スーパーバイザーとしての仲介者、仲介者の援助、友人コミュニティ参加、仲介者の配慮		
	他国留学生との接近欲求			
	関与機会への満足感			
	情報共有の利益と容易性	必要な生活術共有、情報収集、困った時の共感的理解、信ぴょう性の高い情報		
	友人関係形成スキル	開始	受動的イベント参加、飲みニケーション	
形成		年齢的共通点、環境的共通点、会話共通点、授業時間共有日本人集団の親和性、遊び時間共有		
友人関係 (日本人)	日本人仲介者	相談、情報収集、安心材料、生活支援		
	文化依存的親和欲求	友人関係形成欲求、快適性、自文化フィールドでの活動、自文化優位的職場への接近、現地日本人コミュニティでの友人関係形成		
	日本人留学生回避欲求			
	関係開始の容易性	親密関係、言語的無障壁、同一事態経験者、日本人アイデンティティ		
	友人関係形成スキル	情報共有、時間共有、非外国感の経験、ネットワーク形成		
	友人関係不形成スキル	過度な遠慮		
友人関係 (生活者)	友人関係形成利益	リスクの未然防止、社会的困難の軽減		
	関係形成スキル	返報性、日本文化的表情認知支援、対等性保持、積極的生活関連情報収集		

考察

日本人留学生が留学中にどのような対人行動を実践し、どのように異文化間友人関係を形成していくのかを辿っていったところ、3名の持つパターンが浮かび上がってきた。

併存的スタンスのA氏

留学初期には、人と知り合う機会になるようなイベントへの参加には乗り気でなかったが、参加したところ友人ができ、その後は友人関係形成に前向きになっていった。日本人の遠慮や謙遜がホストとの友人関係形成に支障をきたすことが分かってからは、日本文化に準拠した対人行動の実践をやめて、自分から積極的に自己呈示をするなど、現地で社会文化的に受け入れられる行動に換えていった。

A氏は、元来友達と深く付き合っていくほうではないとしつつも、日常での友人との関わりは多く、自分のニーズに見合った友人選択を実践していた。友人のサポート提供機能は、属性によって分化していた。ホストや現地で生活する他国の友人からは社会生活に関する情動的サポート、留学生からは留学生活に必要なサポート、留学生以外の人からは各々の特性に応じた多様なサポートを受けていた。また日本人や他国留学生とは異文化滞在者として共感し合い、安心感などの心理的なサポートを得ていた。

友人関係性を維持し拡大するためイベントを開催し、日本文化をうまく使って留学生の友人を作り、職場でも周囲と関わるよう努めていた。その結果、異文化体験が広がり友人も増えていった。友人関係を築いた相手とは積極的に関わり、会う機会を自分で作り出すなどネットワークのメンテナンスにも励み、関係を維持していた。

A氏は、渡英以前に培った友人関係形成の価値観や方法を基盤としつつ、自分の中の日本文化を意識したり、現地の文化になじむ方法を適宜使ったりしながら、その場にふさわしい自分を構築していくという意味で、いわば二文化の併存的なスタンスをとっていたといえる。

固定的スタンスのB氏

B氏は、学業達成を自己実現と強く結びつけていた。友人には、心理的サポートをさほど求めておらず、共に遊びに行くようなコンパニオンシップにも関心は薄かった。学業に必要な情動的サポートを得るべく、実のある関わりに関心を向けていた。渡英当初は日本人との接近を避けていたが、その後は日本人コミュニティを作り、そこに関わってくる留学生とは付き合っていた。この意味では受け身ではあるものの、形成した友人関係には充足感を抱いていた。勉学に役立つ人という友人選択の方針は明確で、友人作りの対象となる者は限定されていた。

日本人の感覚では考えられないような、ホスト文化に基づいた行動が繰り返される現地のイベントには参加しなかった。自文化の規範にそぐわない場を避けたことで、友人関係を開始する機会自体が減ることにもなっている。これを、以前から持っていたフィルター越しに物事を評価し、それに合うように物事を選んでみるとみれば、新しい環境にあってもわりと固定的なスタンスをもって、友人関

係形成にのぞんでいるといえるかもしれない。

文化開発的スタンスのC氏

元来友人関係形成には消極的な方だったというが、他国人留学生の友人ができ、その人が友人を紹介してくれて、関係拡大の仲介者として機能した。この人は友人関係形成のキーパーソンで、かつ対人行動のモデルにもなった。現地での友人作りの行動を見習ったことが役立ち、友人関係が広がった。他者の行動から学び、自らその行動をまねることで友人関係形成が進んだという点では、友人作りを目指して行動の選択と実践を戦略的に行ったといえる。友人関係形成を図る行動を身に着けたC氏は、さらに新たな友人を求めべく、習い事を始めるという行動を起こした。

日本人留学生や他国留学生との関係には、心理的サポートを求めている。相談の聞き役になることが得意と自覚していたC氏は、待ち受けて話を聴くだけでは受動的に過ぎると考えて、話を聴くために自分から話しかけるという行動を起こした。

異文化圏での対人交流において、自文化では行っていなかった行動を新たに自分のものとし、異文化間友人関係形成を前進させている。これは異文化を取り込んで新しい自分を作っていく、いわば開発的なスタンスといえるかもしれない。

総合考察

今回の3人に共通するのは自らの友人観や友人の持ち方が基盤にあることで、そのうえで異文化を取り入れたり、自文化を維持したり選択的に使ったりと、文化的な対応の仕方が選択されていっていた。すなわち異文化において友人関係を形成する際のスタンスには、文化との向き合い方の多様性が認められる。

A氏は、自ら能動的に対人関係を築き、友人関係を広げていたが、その方略をみると、自文化とホスト文化の2つの文化が併存している。自文化に準拠した認知行動的基盤の上に、ホスト文化で受け入れられる形に調整した認知や行動が積み重ねられ、A氏にとっての友人関係形成のソーシャルスキルが行使されている。

B氏は、学業達成に必要な関係に限定した友人関係を築いた。その方略には、自文化で築いてきた考え方や関わり方の維持がみてとれる。そして自文化の規範に合うかどうかという観点から、友人との関わりも選択している。B氏の友人関係形成のための考え方と行動の仕方、すなわち認知行動的ソーシャルスキルは、文化的に変容することが少なかったといえよう。

C氏は、文化的な行動を模倣しながら新しい自分を作りだす努力を、主体的に行っていた。新環境で得られる友人関係形成のチャンスを活用していき、その中でホスト文化となじみ、新しい認知行動的ソーシャルスキルを身に着けて、友人関係形成を進めていった。

では異文化間友人関係形成は、どうしたら発展させられるか、対人行動の実践という観点から、最

後にこの問いを考えてみたい。まずホストに限らず現地で生活する他国人との間にも、異文化間友人関係は構築される。異文化滞在者としての対等さと共感からそこに関わりやすさを覚える場合は、相互の文化交換の一助として日本文化を効果的に使うことが考えられる。

ホストに対しては、意識的に行動を観察したり取り入れたりして、現地の社会文化的文脈の中で適応的な対人行動を実践することが考えられる。日本で培ったソーシャルスキルをもとに、現地の文化に合う形へと変換していくことができれば、幅広い異文化間友人関係形成を進める役に立つだろう。この意味では、固定的な文化観だと関係形成の幅を狭める可能性があるだろう。ただし留学の意図次第で、友人関係形成にあまり重きを置かない異文化滞在スタイルも考えられる。文化的態度の選択と友人作りの能動性の度合いの組み合わせとによって、異文化間友人関係形成は分岐していくものと思われる。

【謝辞】本研究の一部は、科学研究費補助金（15H0345617/代表：田中共子）の助成を受けました。本稿の一部は、鉄川大健・田中共子（2015）「日本人留学生におけるホストとの友人関係形成：欧州圏への留学に関する事例的検討」（日本応用心理学会第82回大会、10頁）の口頭発表に基づきます。」

引用文献

- 小松翠（2013）. 中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究. 群馬大学国際教育・研究センター論集, 12, 71-86.
- 工藤和宏（2003）. 異文化友情形成におけるコミュニケーション能力:留学生の知覚に基づくモデル化の試み. *Human Communication Studies*, 31, 15-34.
- 日本学生支援機構（2017）. 平成28年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果. 日本学生支援機構.
- 大谷尚（2008）. 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 54, 27-44.
- 大谷尚（2011）. SCAT: Steps for Coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. *感性工学*, 10, 155-160.
- 園田智子（2011）. 短期交換留学生の異文化適応に関する調査報告：主観的適応感と関連要因を探る. *留学生交流・指導研究*, 14, 75-85.
- 高濱愛・田中共子（2009）. 在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用：留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合. *留学生交流・指導研究*, 11, 107-117.
- 田中共子（2000）. 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル. ナカニシヤ出版.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1999). The measurement of sociocultural adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, 23-4, 659-677.

【事例紹介】

『青山学院大学地球社会共生学部』の挑戦

－東南アジア半期留学必須の試み－

The Aim of the School of Global Studies and Collaboration:
Attempting Mandatory Single-Semester Study Abroad in Southeast Asia

青山学院大学地球社会共生学部学部長 平澤 典男

HIRASAWA Norio

(Dean Professor; School of Global Studies and Collaboration, Aoyama Gakuin University)

キーワード : グローバル人材育成、アジアの時代 留学、コンピテンシー、留学の大衆化、
海外留学

2015年4月に青山学院大学10番目の学部として誕生した『地球社会共生学部』も、すでに2年と10か月を経過しようとしている。この春に新1年生を迎えることでいよいよ学部が1年から4年まで揃い、完成年度を迎えることになる。すでに3年生は学部必須の東南アジア留学を終了し就職活動にむけて緊張の時期を迎えつつある。

さて、この時期にあらためて本学部について設立目的から現状までを報告し、グローバル系と言われる大学のなかでの立ち位置を確認するとともに、次なる学部の飛躍に向けて課題を整理することとしたい。

1. 学部設立の背景

〈本学の歴史から〉

「青山学院大学の理念」を示す一文のなかに次のような表現がある。

「本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。」

まさにグローバル人材を育成することが本学の理念として謳われている。

本学の沿革を遡るなら、今から143年前、米国のメソジスト監督協会から派遣された一人の若いアメリカ人宣教師ドーラ・E・スクーンメーカーが麻布に開いた女子小学校にたどり着く。当時23歳だ

った彼女によって明治維新後まもない日本に人間教育の種が播かれたのである。この意味で本学はその誕生からグローバルであり、英学、女子教育、そして社会奉仕、社会貢献がその特徴であった。

近代的教育の黎明期から国家主義教育に拍車がかかる戦前期まで、キリスト教信仰に基づく教育は政府から必ずしも歓迎されたわけではなかった。戦後、民主化教育へと転換され、1949年になってようやく本学も新制大学として再出発をする。この時期、本学文学部英米文学科の卒業生がGHQの通訳として重用されたという。

それから30年、1982年に本学は国際政治経済学部を設置する。わが国がバブル経済の坂を駆け上がる時期、当時の理事長が国連を訪問した際、日本人職員の数の少なさに驚き日本を世界に発信できる人材を育てるためにと設立した学部である。¹

それから更に30年、世界は国際化からグローバル化へと移行した。国際的な問題は国家間の取り決めで解決される時代から、それでは解けない問題が噴出する時代となった。²国家、宗教、民族、性、さまざまな垣根を越える試みが求められる時代である。「地球社会共生学部」はまさにそのような時代に地球の抱える問題を解決すべく人材を送り出す学部として開設されたのである。すなわち、地球規模の視野で問題を捉え解決することを目標に知恵(社会科学の知識)と力(留学を通して培うコンピテンシー)を身につけた人材を輩出することが本学部のミッションなのである。

<学部のグローバル化とグローバル学部>

グローバル化時代の問題を解決する人材を育成するには新たな学部が必要なのだろうか、それとも既存学部で語学を中心としたコミュニケーション教育を強化すれば十分なのだろうか。いずれのアプローチもそれぞれ意味はあるだろう。確かに経済学部で語学教育を厚くすることで国際的な経済人は作られるだろうし、法学部で語学教育を徹底することで国際的な法律に携わる人材も作れるだろう。

ではあらためてグローバル人材育成を標榜する学部は語学以外に何を教授すべきなのか。2000年代に文部科学省の誘導のもと、多くの大学が見出した方向が「国際教養」の視点である。これに先立ち、多くの大学はいわゆる「教養」課程の改革に取り組んでいた。専門は学部レベルでは教えられない(教えても無駄)との理解が一部にあったのかもしれない。リベラルアーツ回帰が歓迎され、世界に飛び出す学生には国際的な教養こそ求められるとされた。秋田の国際教養大学をその典型として、この型の学部の設置がひとつのトレンドとなった。³文部科学省の大学政策もそこに誘導しようとしているようにも思われる。

ところで、地球社会共生学部の設立は2015年であるから、これら先行する大学と比べれば2周遅れ

¹ 当時、国連職員数の上限は出資金に応じて定められていたという。わが国はその枠をほとんど使っていなかったわけである。

² それらをグローバルイシューズ(地球規模の課題)と呼ぶ。

³ 早稲田大学国際教養学部、法政大学GIS(グローバル教養学部)、立命館アジア太平洋大学、国際基督教大学などがその範疇に属する。

3周遅れの感は否めない。しかし、それだからこそ、本学部が世に問うグローバル人材は独自の設計思想を求め、「社会科学系グローバル学部」という類型にたどり着き、これを提示することで青学らしいグローバル人材育成の仕組みづくりに挑戦しようとした。以下にこの類型を提示するに至るロジックを示したい。

2. 学部の基本設計

〈アジアの時代に向けて〉

大学は新たな知識を生み出す研究機関であると同時に多くの学生に知識を伝達する教育機関である。教育は未来に向けて行われる。すなわち短期的には卒業後社会が必要とする能力を身につけさせること、長期的には社会そのものの変化を予想して必要なスキルとマインドセットを養成することが大学の教育的使命である。そうであるならば、現代の教育は10年後、20年後、30年後に役立つものを今提供しなければならない。

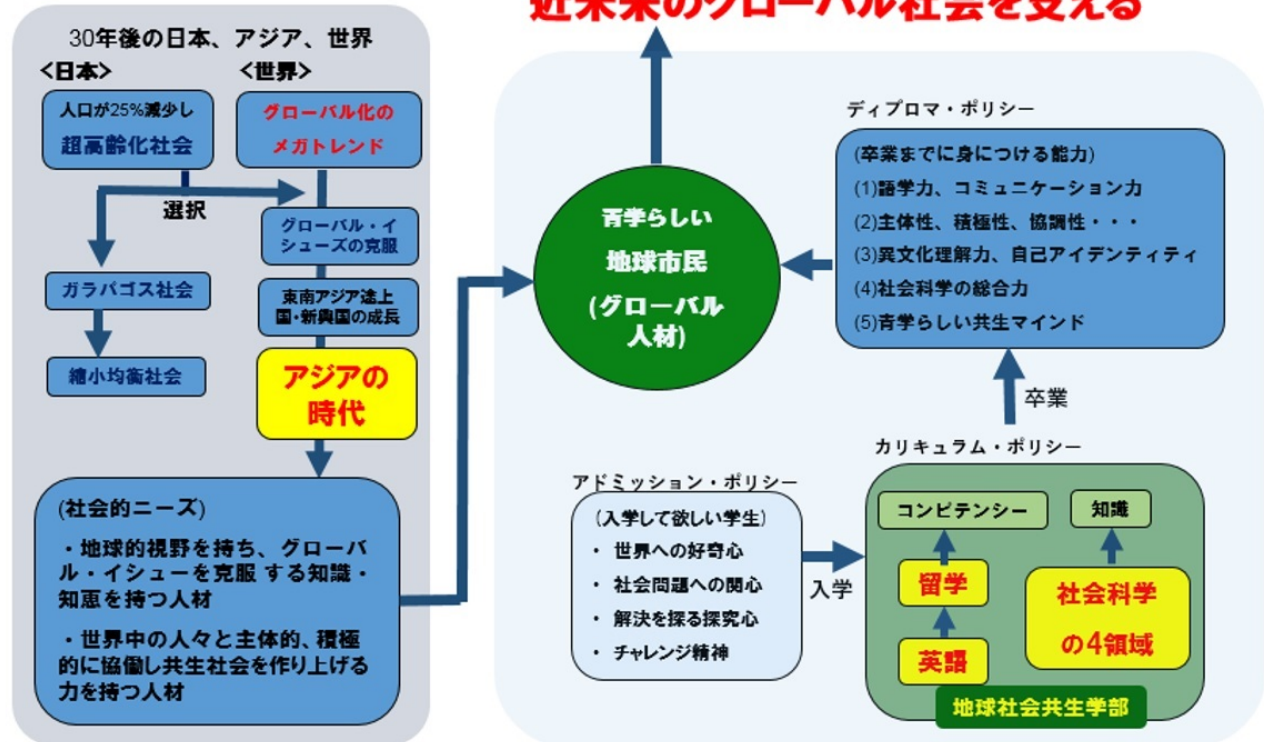
では30年後の日本、世界はどのようなもので、どのような知識と力が必要なのであろうか。日本は少子高齢化が急激な速度で進展し、人口は25%ほど減り、社会保障負担は国民生活を大きく圧迫すると予想され、世界人口が90億へと増え続ける中、世界のなかでのプレゼンスを大きく減ずることが危惧される。一方、世界の覇権国は欧米からアジアに移行するというのが各種研究機関の共通した予測である。⁴現在世界のGDPの4割を生産している欧米はこれからの30年間でそれを2割へと半減させ、3割だったアジアが5割を上回るという。「アジアの時代」の到来である。世界史の文脈では産業革命後この300年間だけ欧米に明け渡していた地位をアジアが取り戻すだけであるともいわれる。

〈「グローバル人材」の名に値する人材像〉

この予測が実現するには現在途上国、新興国であるアジア諸国が十分な経済発展を遂げることが不可欠であるが、発展を妨げる要因を排除できるなら、それは実現可能である。われわれはグローバルイシューズの排除こそアジア諸国の発展、アジアの時代の到来をもたらす鍵であると考え。ちなみにグローバルイシューズとは、差別、貧困、紛争、情報格差、人権、地球環境、女性、食料、水、エネルギー、公衆衛生・・・といった地球規模の課題にほかならない。これらが途上国で特に深刻な問題であることは容易に想像できるであろう。最近では国連の掲げたSDG'sの目標と重なる。これらグローバルな課題の解決に挑戦する人材こそグローバル人材の名にふさわしい。日本社会を停滞から救うことを目標に1980年代に言われた企業戦士の再現をグローバル人材と呼ぶのではあまりに近視眼的と言わざるをえない。本学部の育成する人材像は、未来社会は共生社会であるべきという社会のあり方に関する提案をも内包するものなのである。

⁴ アンガス・マディソン『世界経済史概観』2015、エコノミスト誌『2050年の世界』、アジア開発銀行。

学部設計の考え方



3. 詳細設計

〈ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー〉

本学部が育成する人材像は「グローバルイシューに立ち向かう力を備え、それによって途上国・新興国の発展を支援し、来るべきアジアの時代のなかで共生社会の実現に貢献する人材」と要約できる。そしてこれから、社会科学の4領域からなるカリキュラムが演繹される。

- (1) 「差別」のメカニズムを理解し、解決の手段を模索するための「ソシオロジー領域(社会学、文化人類学)」
- (2) 経済の仕組みを知り、産業を興し雇用を創出することで「貧困」を克服する方法を学ぶ「ビジネス領域(経済学、経営学)」
- (3) 異文化を理解し、「紛争」が発生するメカニズムを調べ、解決の手法を考える「コラボレーション領域(政治学、国際関係論、異文化理解)」
- (4) 「情報格差」を埋める報道のあり方やメディアリテラシーについて学び、情報を利用した社会貢献を研究する「メディア/空間情報領域(ジャーナリズム、空間情報学)」

社会的インフラの未整備な途上国・新興国を想定したとき、これら4領域について一定の水準の知識を身につけていることは必須であろう。また、これら4領域は学科でもコースでもない。あえて垣根を設けないクラスター概念で配置し、学生は自らの関心と将来のキャリアを想定して、個々にカス

タマイズしたカリキュラムを作り上げることができる。地球上の課題は実に多様である。単一のディシプリンパッケージの修得のみで解決できるものではない。

＜「力」を養う「留学」＞

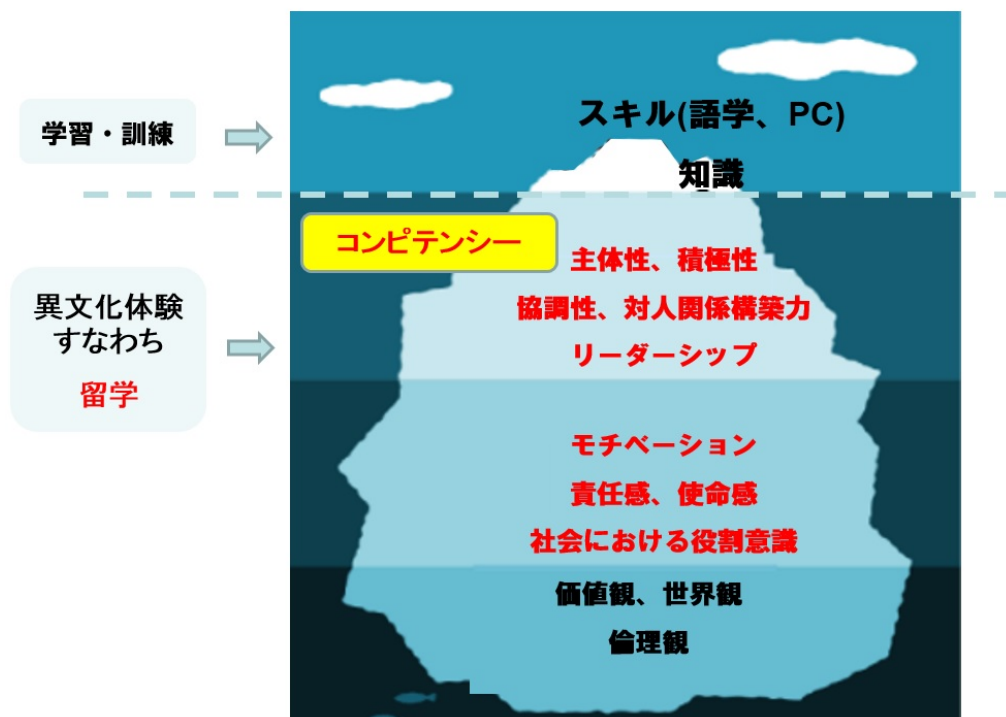
さて、さきに「知恵と力」という表現に注目してもらったが、知恵が上記の科目カリキュラムであるとする、「力」とはなんだろうか。グローバル人材の要素として、しばしば

- ① 語学力・コミュニケーション能力
- ② 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- ③ 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

が示される。⁵①③は座学で身につけられる能力であるが、②は教師が黒板を背にした授業で得られるものとは考えにくい。しかし、②こそがグローバル人材にとって最も必要な素質といっても過言ではない。近年、各大学でアクティブ・ラーニング、PBL、反転授業など各種の手法が取り入れられつつあるのは②を育むことへの大学人の悪戦苦闘を物語っている。

われわれはこのコンピテンシーを育む最も効果的な方法こそ「留学」であろうと考えている。あえてコンフォートゾーンの外に学生を追い出し、負荷をかけた中で生活をさせる。言葉が不自由で、地理にも不案内、習慣も異なるなかでは自ら現地に溶け込む努力なしには生活できない。しかし、一度それができたなら、彼の能力は伸びており、二度目からは負荷と感ずることはない。もちろん、その間はさまざまな葛藤があり、不安に苛まれ、辛い時間を過ごすことだろう。しかしそれを通過してこそタフな人材、ストレス耐性のあるレジリエントな人間へと成長するはずである。

コンピテンシー獲得のための留学



⁵ 文部科学省『グローバル人材育成推進会議 中間まとめ』2011

〈留学の大衆化：全員留学〉

景気が低迷し雇用状況が不安定であったバブル崩壊後のいわゆる「失われた20年」時代には学生は内向き志向のマインドが醸成されていったと思われる。留学で就職活動に出遅れると正規雇用の機会を失うという不安感で学生たちは留学に躊躇する状況に追いやられた。また、少子化は大きな教育投資で大学まで行かせてくれた両親の老後をみるという暗黙の圧力が一人っ子の肩にのしかかる。こうして2004年の8万人をピークに、我が国の海外留学者数は6万人程度まで落ち込んだ。⁶この間の中国、韓国の留学者数の伸びと比べると、教育関係者ならずとも何とかしなければの思いを禁じ得ないであろう。⁷これが2000年代に文部科学省があわてて大学のグローバル化に舵を切らねばならなかった理由のひとつである。

ここにきて、わが国の大学でも徐々に学生を(大学または学部、学科単位で)全員留学の制度を採用するケースが増えはじめてきているようであるが、一応この傾向は歓迎すべきものと言ってもよいだろう。もはや一部のエリートだけが留学する時代ではなく、普通の学生が学びの一過程として留学を経験する時代、すなわち留学大衆化の時代に入ってきたのである。⁸さて、いよいよ地球社会共生学部の実施する留学についてその特長を詳述するとしよう。第一に、全員留学を必須としている。入学した学生全員をグローバル人材とするために、コンピテンシー獲得を目的にカリキュラムに留学が組み込まれた。第二に、留学先はタイ、マレーシアの7大学である。アジアの時代に向けての人材育成の視点から、留学先は当然アジアとなる。⁹第三に、語学留学ではなく現地で専門科目を受講する。語学のみならば留学の必要はない。現地でなければ得られない「何か」が大切なのである。現地学生と机を並べて学び、ディスカッションをする経験、そこで実感する異文化こそ学生の視野を拓ける。第四に、期間は最低でも1セメスター。1か月以下では観光客の視点でしか物を見られない。約半年の期間の現地生活でようやく生活者、労働者の視点でものを見るようになる。第五に、現地でのフィールドスタディを義務付けている。大学内にとどまらず、積極的に街へ、村へと背中を押す仕組みである。第六に、留学費用は留学時に数百万円を別途徴収するしくみではなく、基本、授業料のなかで負担される。普通の学生が留学できるようにするためである。第七に、父兄対応も含め幾重にも重ねたリス

⁶ OECD 統計による。

⁷ 「中国留学発展報告(2016)」によれば2015年の留学者数は126万人。世界全体の留学者の25%は中国人であるという。(「京大東アジアセンターNews Letter」2017年1月)総人口でわが国の半分以下の韓国の2011年の留学者数は約13.8万人で、わが国の約2.4倍である。(「若者の海外留学を取り巻く現状について」文部科学省、平成26年4月)

⁸ グローバル人材に必須の語学力をとっても、日本人の語学力はまだまだ低水準である。『2016 ワールド・タレント・レポート(世界人材調査)』は調査対象61か国中最下位であると指摘している。留学の大衆化が言葉の壁を突き破ることを期待したい。

⁹ 韓国、台湾、中国はすでに経済発展を遂げた国として留学先から除外され、アセアンのその他の国は留学のリスク管理の面から除外された。中長期的には世界の生産拠点の移動に伴い留学先は変更されるであろう。

ク管理のためのセーフティネット。紙面の関係上、割愛せざるを得ないが、ここにかけた学部教職員の準備は相当なものであることを付言しておきたい。

ところで、全員留学を必須とすることの学部側の責任は大変に大きいものとなることを強調しておきたい。単純に希望者のみの留学であるなら、全てが基本的に自己責任であり、その手続きは多くの大学では国際センターの専門の職員に任せていることであろう。学生は自ら語学試験のスコアをとり、希望する留学先を選び、協定校の要求を満たしていれば、留学でき、帰国後現地で修得した単位を認定して、留学が完了である。このプロセスに通常の学部教員はほとんど関与しない。しかしながら、本学部では留学が必須である。つまり、教育のプログラムに含まれており、留学中の学生の学びに学部として責任が生じているのである。日本にいない間も我々は教育をしている。実際、フィールドスタディの指導は複数の教員が手分けしてフェイスブック、スカイプ等で定期的実施している。¹⁰ 学びの面以外の生活指導も現地校の教員との密なる連携のもと、問題があれば主体的にかかわる。留学中は相手校に一任という旧来型の全員留学もあるかもしれないが、本学部の教育は違う。実際、第一期生の留学時、学生の病気等の対応で教職員が急遽現地に赴くといった対応も実施している。

4. まとめ、これからのグローバル人材育成に必要な視点-

本学部は東南アジア留学を学部生全員に課すという試みに着手した。留学の大衆化をリードする試みと言えよう。しかし、留学の大衆化は一方で「留学のコモディティ化」をもたらす。すなわち、どの大学でも同じような留学プログラムを提供する可能性が生じ、何のための留学かという視点が希薄化する。われわれの学部はこの点を特に意識して制度設計を行った。私学、しかも143年の歴史あるキリスト教信仰に基づく教育を提供し続ける学院にふさわしいグローバル人材作りを意識したものである。確かに文部科学省の指差す方向を向いているかもしれないが、本学部の卒業生はたとえ一般企業に就職したとしても根底には青学らしいマインドセットが流れているはずである。ゼネコンに就職する者は東南アジアのインフラ整備を生きがいにするだろうし、金融に進む者はソーラー発電の企業への融資を積極的に進め、食料メーカーに就職した者は、そのときが来れば貧困地域の食料環境の改善を提案するはずである。いずれも差別、貧困、紛争、情報格差への挑戦の姿勢を持っている人材となっているはずである。

留学から戻った学生のひとりが次のように述べていた。「辛かった。でも、すぐ慣れました。3時間の授業の2時間は教授の話、一生懸命ノートをとり終わると、次の1時間は学生同士のディスカッション。やっと終わって寮に帰ろうと思ったら、みんな図書館に行くんですよ！ 僕も行くようにしまし

¹⁰ フィールドスタディは留学前の「フィールドワーク論」、留学中の「フィールドワークⅠ」留学後の「フィールドワークⅡ」と連携され、学ぶために、調べるために留学するという意識づけがなされている。

たけれどね。」

世界の誰も知らない地域で、産業を興そうと、紛争をなくそうと汗を流す日本人がいたとして、それがわが学部の卒業生であったなら、それが学部創設にかかわった教職員の努力が報われた瞬間といえるであろう。

【事例紹介】

グローバル化時代と大学の海外感染症危機管理

-学校医が経験した 2014 年エボラウイルス病アウトブレイク-

Risk Management of International Infectious Diseases in the
Globalization Era at a University:

Experience of 2014 Ebola Virus Epidemic as a School Doctor

慶應義塾大学保健管理センター副所長 横山 裕一

YOKOYAMA Hirokazu

(Deputy Director, Health Center, Keio University)

キーワード：エボラウイルス病、グローバル化、危機管理、説明責任、保健管理センター、海外留学

はじめに

近年のグローバル化を背景に、大学の国際交流がさかんになっている。筆者は 1996 年から慶應義塾大学保健管理センター（本センター）に勤務しているが、就任当時に比べ、短期の活動や留学で海外渡航する学生が格段に増えていることを実感する。（長期留学者については不明。）国際交流の活発化は、本センターの国際感染症対応の機会も増やしている。今世紀になって、筆者は、重症急性呼吸器症候群（SARS）疑いのカナダからの留学生、デング熱を発症した東南アジアからの留学生、中東呼吸器症候群（MERS）流行地へ出張予定の本学教員、米国からの大学病院へのヒストプラズマ症持ち込み例、などの対応機会を経験した。幸い筆者は、2000 年から慶應義塾大学病院の感染対策委員を兼務しており、慶應義塾大学病院感染制御センター（病院感染制御センター、現感染制御部）の指導を仰ぎながら、これらの事例に対処することができた。

グローバル化社会になり、従来社会にはない種々の変化が起こり、それに伴い危機管理のあり方も変わってきた。感染症の分野でも、1) 邦人が、かつてはあまり行かなかった国や地域に出向くことになり、その地域特有の感染症のリスクを負うことになった、2) 交通網の発達と人々の国際的な交流の活発化につれ、かつては一地方だけの問題であった風土病が世界に伝搬するようになった、の 2 つの変化が顕著で、グローバル化の時代の感染症の危機管理はこの 2 点を踏まえて展開する必要がある。上述した国際感染症対策に加え、筆者は、大学の A キャンパスと B キャンパスを担当してい

た2014年に、エボラウイルス病（エボラ出血熱；EBOV病）のアウトブレイク（OB）対応を2回経験した。1つは世界的脅威となった西アフリカに始まったOBの対応で、もう1つはあまり知られていないが、Congo民主共和国（コンゴ）で起きたOBの対応である。実際にEBOV病患者を診療したわけではないが、この2回の経験により、グローバル化社会特有の感染症のリスクを体感できた。また、今後、本センターがグローバル化社会に対応した感染症の危機管理体制を構築していくきっかけになったとも考えている。今後、グローバル化社会の中で活躍する教職員、学生をよりの確に支援していくために、そのような体制の構築は必須であろう。

1) 2014年春～夏—西アフリカでのEBOV病アウトブレイク

2014年3月10日Guinea共和国（ギニア）の南部都市であるGuéckédou およびMacentaの医療機関から、発熱、下痢、嘔吐を伴い死亡する病気が複数発生していることがギニア保健衛生当局へ報告された。3月22日までに、複数の患者検体から3種のEBOVが検出され、それらの遺伝子配列（Gene Bank Accession No. KJ660346、KJ660347、KJ660348）から、そのOBの責任ウイルスは既知のEBOV Zaire種の亜型のEBOVと特定され¹、Guinea種と命名された。その後、ギニアの南部都市Kissdougouなどでも患者の報告があり、世界保健機関（WHO）は3月27日の時点で、発症者103人（死亡者66人）と報告したものの²、そのOBはギニア国内に限定しているという認識で、同OBは当初、2014年EBOVギニアOBと呼称された。

しかし、感染はギニアのGuéckédou、Macenta、Kissdougou、に隣接する、Sierra Leone共和国（シエラレオーネ）やLiberia共和国（リベリア）へ伝播し、以後3国で患者数が爆発的に増加した。その状況から、2014年EBOVギニアOBは2014年EBOV西アフリカOB（西アフリカOB）と呼称が変更され、米国疾病対策センター（Center for Disease Control and Prevention; CDC）は8月6日にその警戒レベルを最高のレベル1に引き上げ³、8月8日には世界保健機関（World Health Organization; WHO）もこの事態に対して「国際的緊急事態」を宣言した⁴。その後、患者はアフリカ諸国に広がり、ギニアの北に隣接するSenegal共和国（セネガル）やMali共和国（マリ）、さらにはギニアから1,200 km離れたNigeria連邦共和国（ナイジェリア）でも患者が確認された¹。

2) 2014年夏—学校医が経験したEBOV病

本学は2008年からCongo-acadex-project⁵というコンゴのKinshasa近郊でのフィールドワーク活動を展開しており、毎年、AキャンパスとCキャンパスの教員と学生が参加している。2014年は参加者が8月6日に現地入りした。しかし、上述のように、時同じくして、CDCおよびWHOが西アフリカOBに対して最大限の警戒宣言を行ったため³、⁴、コンゴは同OBの対象国ではなかったものの、本学はプロジェクトの打ち切りが妥当と判断し、参加者全員がその指示に従い8月17日にコ

ンゴから出国し、18日以降に日本へ帰国した。

8月17日に本センターは、Aキャンパスから、これらの学生、教員に対してとるべき対応について相談を受け、Aキャンパス担当医であった筆者が対応した。当時、筆者のEBOVに関する知識は限定的だったため、まず、EBOVについて基本情報を調べ⁶、それに基づき対策を構築した。もっとも、この時期は、西アフリカ0Bは西アフリカに限局した事象であったこと、また、本ケースの対象者はその西アフリカ0Bとは無関係のコンゴからの帰国者であったことなどから、登校禁止や、対象者の監視など特別な措置は不要とした。しかし、病院感染制御センターと相談の上、対象者に、EBOV病の潜伏期間は通常3週間であること、発熱や消化器症状が起こること、感染形態は接触感染であること、EBOV病の潜伏期にはほとんど他人に感染しないこと、帰国後発熱した場合はまず保健所に連絡することなど、EBOV病の基本情報を記したパンフレットの配布を行った。また本件は、筆者より本センターのCキャンパス担当者にも伝えられ、Cキャンパスでも同様の措置がとられた。

ところが、8月25日に、帰国後もコンゴの状況をフォローしていたAキャンパスの教員(D氏)よりコンゴでも同国のIkanamongo村での患者を発端にEBOV病患者が複数発生し、西アフリカ0Bとは別に2014年コンゴEBOV病0B(コンゴ0B)が宣言されたとの情報提供⁷があった。しかし、コンゴ政府およびWHOによるコンゴ0Bの宣言は夫々、8月21日と24日で⁸、Congo-acadex-project参加者全員が出国した17日以降のことであり、少なくとも、公的には参加者を、EBOV0B流行地からの帰国者と看做す必要はないと考えた。また、報道では、コンゴ0Bはprojectの活動地から1,200km離れた地区で発生し⁷、それはコンゴの北西部に限局しており⁹ Kinshasa近郊には及んでいないことも推察された。それらの状況から、当初の方針は変更しなかった。しかし、やはり病院感染制御センターと相談の上、念のため参加者のKinshasaでの生活状況の調査(コンゴでの活動内容、コンゴ滞在中の体調、現地の体調不良者や発熱者との接触の有無、野生の動物との接触の有無のアンケート)を行った。D氏の協力により、アンケートは参加者全員から回収され、全員がEBOVへの感染機会は無かったと判断された。尚、滞在中に発熱や消化器症状を訴えた者が数名いたことが判明したが、いずれも数日で快復しており、EBOV病とは無縁と考えた。

その後、参加者がコンゴから出国した8月17日より3週間経過した9月6日までEBOV病発症者はおらず、対策は終了となった。本件の経過中に本センターはAキャンパスから、「本件をキャンパス全体に周知する必要があるか」との相談を受けたが、筆者は「法的には流行地域からの帰国ではないので不要」との見解を示し、キャンパス全体への広報は行わなかった。

3) 2014年秋—米国 Dallas での EBOV 病

西アフリカ0BはEBOV病が先進国へ持ち込まれたという特徴を持つ。この持込みは、現地で発症した患者を治療目的で各国の医療機関に運び込んだ例、現地で感染し潜伏期間の間に各国へ入国し、そ

の後発症した輸入例に加え、各国の医療施設に収容された患者からの二次感染例もあった。New York Times は 2015 年 1 月 26 日時点で合計 24 名の患者が欧米 9 カ国の医療施設に収容されたことを伝えている¹⁰。その集計によると米国の医療機関に収容された EBOV 感染者は 10 名であるが、以下に紹介する米国 Texas 州 Dallas で EBOV 病と診断された 3 症例がその中に含まれる。

9 月 20 日に西アフリカから米国 Texas 州 Dallas に帰国した男性が 9 月 24 日に発熱、胃腸症状を訴え、9 月 25 日に Texas Health Presbyterian Hospital (Presbyterian 病院) を受診した。患者は西アフリカへの渡航歴を申告したものの、同院へ収容されることなく一度自宅へ戻された。しかし、28 日に重症化し、同院へ隔離入院となった。その後 30 日に EBOV 病と診断され、10 月 8 日に死亡した。同患者は、同院初診時にすでに EBOV 病を発症していたと考えられ、再入院までは感染源として市中にいたことになり、病院の対応が批判されたとともに、Dallas には EBOV の市中感染（二次感染）が広がるというパニックが生じた¹¹。

また、10 月 11 日と 15 日にその患者の担当看護師 2 名に EBOV 感染が証明され、EBOV 病の二次感染と考えられた。医療現場で医療従事者への二次感染が起きたことで、今度は同院の治療体制に不信感が持たれた¹¹。さらに、二次感染を被った 2 名のうち 1 名が 10 月 10 日と 13 日に発熱していたにも関わらず、飛行機で、Dallas と Cleveland を往復していたことが判明し、飛行機同乗者への感染が危惧され、その点でも同院の管理体制に疑問が投げかけられた¹²。

幸い懸念された Dallas での市中感染は起こらず、CDC が監視下に置いて経過を観察していた問題の飛行機の乗客からも感染者は出ず、EBOV を発症した 2 名の看護師も回復した。しかし、Dallas での報道をきっかけに、感染症治療や予防医療の世界最先端にあるはずの米国の一流の病院で、EBOV に対しての治療体制や予防体制に不備があったことが露呈し、その不安から全米に EBOV 感染が拡大するのではないか？というパニックを生んでしまったと思われる。さらに、それらの加熱報道を受けて本邦でも EBOV に対する恐怖が非常に高まっていた。

4) 2014 年秋—学校医としての 2 回目の EBOV 病 の経験

本邦、そして本学内にも EBOV に対する漠然とした恐怖が広がっていた中、本センターは 10 月 14 日に B キャンパスの教員 (E 氏) より、「10 月 3 日まで Presbyterian 病院で実習していた学生が 2 名いて、うち一名はすでに帰国し登校しているが、どう対応すべきか？」と問い合わせを受けた。

当時 B キャンパスも担当していた筆者がその件も対応したが、その方針の決定に A キャンパスでの経験が役立った。その方針は、1) 実習生に患者や患者の排泄物との接触がなかったか確認する、2) 実習生が Presbyterian 病院の隔離または要観察リストに載るようであればその方針に従う、3) 上記 1) 2) が否定的であれば、登校可とする。4) その場合、Presbyterian 病院を離れてから EBOV 病の潜伏期にあたる 21 日間、対象者を監視する。具体的には毎日の体温と体調を報告してもらう。5)

万が一、実習生に潜伏期間内に急な発熱があれば、直接病院に行かず、本人が保健所に電話し、Presbyterian 病院にいたことを伝え、指示を仰ぐ、というもので、病院感染制御センターの承認を受けて10月15日にBキャンパス側に伝えた。

1)については当該学生の担当教員(E氏)及び本センター保健師が当該学生のインタビューを行い、当該学生がウイルスに接触した可能性は少ないと考えられた。2)についてはE氏が、Presbyterian 病院の担当者とメールで連絡を取り、該当学生が隔離・監視対象に入っていないことを確認した。1) 2)の結果より、3)の方針をとることにした。4)については当該学生から毎日メールでE氏および本センター保健師に体温と健康状態を報告してもらうこととした。また、5)については、本件を保健所と相談する中で、万が一発病した場合連絡するのはAキャンパスのある保健所ではなく、当該者の住民票がある地区の担当保健所であることが判り、そのことをも当該学生に伝えた。

しかし、上述のように本邦でもEBOVの報道が過熱していたこともあり、Bキャンパス側からは、当該学生を潜伏期間の間登校禁止にする提案もあった。さらに本センター内からも、全世界を巻き込んでいる事態でもあり本センターは関わらず保健所にまかせた方が良いのでは?という意見もあった。しかし、前者に対しては、「当該学生が感染した可能性はほぼないこと」「万が一感染していたとしても潜伏期間の間のEBOV病の感染性は極めて低いこと」「感染は空気感染ではなく接触感染であること」などを説明し納得を得た。後者に対しては、学校保健安全法施行規則第18条にある「学校で予防すべき感染症一覧」にEBOV病も記されており、たとえEBOV病でも、学校医は学校に意見を述べる立場にあること、保健所も本邦と無縁のEBOV病の経験は無いと推察され、実際にEBOV病を発症した患者がいるわけでもないのに、前面に立って対応してくれるとは考えにくかったこと、などから筆者が対策を続けることとした。しかし、(対象者の活動地域と実際のウイルスの生息地域が1,200kmも離れていた)Aキャンパスの例とは違い、(対象者がウイルスの至近距離にいた)本ケースでは引き続き以下の検証が必要であった。

まずは対象者とEBOVの接触である。本ケースでは、報道レベルではあるが、Dallas市内にEBOVが撒布された可能性が推測されており、対象者が院外で不慮の接触をした可能性を否定できなかった。それに対しては、種々の米国のニュースサイトを毎日チェックし^{11, 13}、もし、Dallasの市中感染が起これば、当初の方針は変更することとした。しかし、幸い、上述の通り、Dallasでは市中感染は起きなかった。また、看護師2名への二次感染が起きたPresbyterian病院で、当該学生が院内などでこれらの看護師を介しての不慮のEBOV感染を被った可能性も否定できなかった。しかし、幸い、これらの看護師にEBOV病の症状が出現したのは、対象者が病院を離れた後であることが判明し¹¹、「潜伏期には感染しない」というEBOVの特性から、この可能性も否定できた。

一番苦慮したことは、EBOVは遺伝子変異を起こし、その特性を変化させるという事実への対応である。今回立てた対策はEBOVの「感染経路は接触感染で空気感染はしない」「潜伏期には感染しない」

「潜伏期間は3週間程度」という既知の特性を前提に構築されていたが、もし、西アフリカ 0B の責任ウイルスにおいて、これらの特性が覆る変異が起こっていればやはり対策の変更が必須であった。

今回、筆者はコンゴ 0B と西アフリカ 0B の対応を経験したが、前者は従来の EBOV 病 0B と同様に一地域内の 0B で終息したのに対し、後者はすぐに周囲の国に広がり、さらに世界中に広がったという経過をたどった。このアウトカムの違いは、西アフリカ 0B の責任ウイルスでは、特性が変化して感染性が強まった可能性を想像させた。実際に、過去に EBOV の空気感染の可能性も示されている¹⁴。しかし、幸い、対策期間中に今回 0B したウイルスの感染性の特性が変化したことを示す報告はなく、対策の変更は不要であった。尚、最近、西アフリカ 0B の責任ウイルスでは遺伝子変化によりその（感染性ではなく）病原性が高まっていた可能性は報告されている¹⁵。また、この2つのアウトカムの違いの一部は、前者があまり周囲と交流のないコンゴの Ikanamongo 村で起きたものであるのに対し、後者はある程度大きな都市でシエラレオネやリベリアとも関係が深いギニアの Guéckédou, Macenta, Kissdougou から始まったという地勢学的な理由で説明がつく⁸。

その後、両留学生とも Presbyterian 病院を離れた 10 月 3 日より 3 週間経過した 10 月 24 日まで発熱や消化器症状を認めず、本対策を終了とした。

5) グローバル化時代の感染症危機管理とグローバル化社会で活躍する学生の支援体制

グローバル化の進展に伴い、一地域のリスクでしかなかった風土病のリスクに邦人も接触する可能性が生じた。その理由として、1) 邦人が発展途上国にも行く機会が増えたこと、2) 感染症の流行が国境を越え先進国にも及ぶようになったこと、を上述した。今回筆者が経験した2回の EBOV 対応、即ち、A キャンパスおよび B キャンパスでの事例はまさに、夫々がこの 1) と 2) を反映するものであった。前者はコンゴに渡航し、コンゴ 0B に巻き込まれそうになった事例であり、後者は米国留学中に留学先の医療施設に西アフリカ 0B の患者が搬送されたという事例である。

どちらの事例も大きな問題なく終了したが、その背景に、各キャンパスの教員、感染制御センターや保健所からの支援があったことも上述した。今回の紹介事例はキャンパスの感染症対策であったので、本センターが中心に行ったが、どちらも本センターだけでは完遂できなかったと考える。本事例の経験により、危機管理における関係者、関係部署の協力体制の確立の重要性を実感したと同時に、その確立が、海外渡航から帰国した教職員、学生に対するよりの確、より迅速な対応を可能にすると考えられる。

グローバル化社会では、全く違ったバックグラウンドを持つ国々が交流するため、夫々の立場を相手に説明して相互理解を得ることが必須であり、そのために、説明責任 (accountability) が重要となる。これは、従来の責任のとり方である結果責任 (responsibility)、即ち、「種々の決定や行動によって周囲に悪影響が生じないようにする責任」とはやや違ったものである。尚、responsibility

は案件に関わらないことで回避が可能であるという特徴も持つ。実際、今回 B キャンパスの件で、本センターが関与しないという選択肢や、対象者を潜伏期の間登校禁止にして、本センターは対応しないという選択肢もあり、その選択で本センターに生じる responsibility を回避することも可能であった。しかし、学校保健安全法で学校医が対応すべきとされる事象に対し「なぜ関与しなかったのか？」を説明することや、種々の病気を発症した場合の登校禁止措置が示されている学校保健安全法の下で、「発症していないケースを登校禁止にすること」を説明することは難しく、accountability は得られないと考えた。その場合、responsibility が回避されてもグローバル化標準の危機管理にはなりえないと考え、筆者は accountability の確立を目指した。

accountability 確立の基本は情報収集にある。実際、特に B キャンパスの事例では、多くの情報が集められ、筆者らが決定した対策の accountability は強固になったと考える。尚、情報は筆者のみならず、担当教員、担当保健師によって収集されたものも多く、情報収集の面でも協力体制が確立していた。ことに、広範囲から、多くの情報の収集が必要なグローバル化社会における情報収集においては、多くの協力が得られ、より多くの情報が集まることに越したことは無い。尚、情報収集や情報の交換は、重要な部分は直接の面談や電話で行われたが、多くの場合、インターネットやメールなどの information technology (IT) を介して行われた。特に海外の情報の収集や、海外との交信において、IT は必須であった。「IT はグローバル化を支えるツールの一つ」とされる定立 (テーゼ) を実感することができた。また、今回の事例において、accountability の獲得を目指すこととし、それを実行していったことで、グローバル化社会における責任の取り方を体感することができたと考えている。

上述したように学校保健安全法では、例え EBOV 感染症であっても、学校からの求めがあった場合は、学校医は意見を述べる立場にある。今回紹介した 2 事例は、筆者が大学病院の感染対策委員の経験を有していたこと、病院感染制御センターと相談できる立場にあったこと、最初の事例の経験が後の事例の対応に非常に役立ったこと、などのアドバンテージがあり、スムーズな対応が可能であったと考えるが、今後、同様の国際感染症対応の機会も、本学のみならず、本邦すべての大学で起こりうると考える。その場合、その大学の学校医が保健所、関連部署、関連教員などと協力体制を築き、危機管理を展開していくことが肝要で、それによって、その学校で、グローバル化社会の中で活躍する教職員、学生をより強固に支援できる体制が確立されていくと考える。

また、今回の事例は、海外渡航を計画する学校の教職員、学生各個人の危機管理のあり方についても大きな示唆を与えている。通常は渡航しない国へ出かける際には、現地の感染症を含む種々の情報収集が必須であることは勿論であるが、グローバル化社会では、通常は経験しないリスクが世界中に拡散する可能性を孕む。このことは、先進国へ出かける際にも現地のリサーチが必須であることを意味する。海外渡航前の情報収集については筆者の別稿に譲るが¹⁶、本邦外務省のサイトにある海外

安全ホームページ¹⁷で渡航先の情報を得ておくことは最低限の準備であろう。同サイトは感染症の情報のみならず、武力衝突、テロ情報、その地域で流行している犯罪の手口などを含む治安の情報や生活の基本情報なども掲載しており、非常に有益である。

以上、筆者が学校医として経験した2回のEBOV 0Bの経験を基にグローバル化社会における大学での国際感染症対策のあり方、その体制構築、それらの意義について述べた。

文献

- 1) Baize S et al. N Engl J Med 2014; 371:1418-1425.
- 2) Gulland A. BMJ 2014;348:g2473
- 3) NBC NEWS/CDC. <http://www.nbcnews.com/storyline/ebola-virus-outbreak/cdc-raises-response-highest-alert-amid-ebola-outbreak-n174496>
- 4) The Guardian. <http://www.theguardian.com/society/2014/aug/08/who-ebola-outbreak-international-public-health-emergency>
- 5) Keio SFC Yoko Hasebe Lab. <https://www.kri.sfc.keio.ac.jp/report/gakujutsu/2008/2-6/report/activities/congo.html>
- 6) 横山裕一。慶應保健研究 33;15-22、2015
- 7) Reuter. <http://jp.reuters.com/article/topNews/idJPKBNOG00WT20140824>
- 8) Gael D et al. N Engl J Med 2014; 371:2083-2091.
- 9) The Washington Post. <http://www.washingtonpost.com/news/morning-mix/wp/2014/08/25/a-second-and-different-ebola-outbreak-hits-congo-the-fifth-infected-african-country/>
- 10) New York Times. <https://www.nytimes.com/interactive/2014/07/31/world/africa/ebola-virus-outbreak-qa.html>
- 11) Health map. <http://www.healthmap.org/ebola/#timeline>
- 12) abcNEWS. <http://abcnews.go.com/Health/nurse-contracted-ebola-called-cdc-flight-official/story?id=26232809>
- 13) The Guardian. <https://www.theguardian.com/world/2014/oct/15/ebola-epidemic-2014-timeline>
- 14) BBC News homepage. <http://www.bbc.com/news/science-environment-20341423>
- 15) Diehl, W.E. et al. Cell 167、1088-1098、2016.
- 16) 横山裕一他。Campus Health 54(2); 41-46、2017
- 17) 外務省。 <http://www.anzen.mofa.go.jp/index.html>

【海外の教育事情】

韓国における留学生送り出しの現況

－2010年代以降を中心に－

The Current Status of the Korean Students Studying Overseas:
Focusing on the 2010s

畿央大学教育学部・准教授 石川 裕之

ISHIKAWA Hiroyuki

(Associate Professor, Faculty of Education, Kio University)

キーワード：韓国、留学事情

はじめに

グローバル化が進展する21世紀において、海外留学によって最先端の知識・技能を身につけた人材や高度な外国語能力と国際的感覚を身につけた人材は、当該国家の発展を担う重要な人的資源と見なされている。それでは、わが国と同様に天然資源に乏しく、社会・経済・教育システム上わが国との類似点が多く、しかもわが国よりもさらに人口規模の小さい隣国韓国では、留学生の送り出しに関する諸課題に対してどのように向き合っているのでしょうか。2000年代までの韓国の留学生送り出し政策の変遷については、本誌で鄭（2006年）や長島（2011年）が明らかにしている通りである。そこで本稿では、2010年代以降の変化を中心に韓国の高等教育段階における留学生送り出しの現況について述べていくこととしたい。

1. 留学生送り出しの国家目的—学問研究の振興—

韓国の教育基本法では、留学生送り出し（「国外留学」）振興の目的について次のように規定している。「国家は学問研究を振興するために国外留学に関する施策を用意しなければならない、国外においてなされるわが国に対する理解とわれわれの文化のアイデンティティ確立のための教育・研究活動を支援しなければならない」（教育基本法第29条第3項）。ここに示された通り、韓国における留学生送り出しの国家目的とは第一義的に学問および研究の振興にある。現在、後期中等教育段階以上の海外留学は私費留学を含め自由化されているが¹、こうした国家目的から韓国の留学生送り出し政策は基本的に高等教育段階以上を想定したものとなっている。

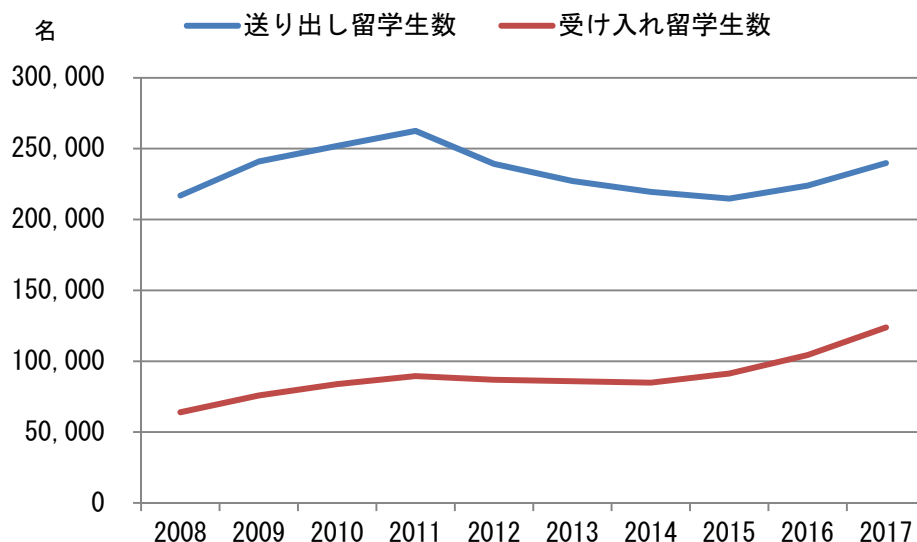
歴史的に見ても韓国では、ミネソタ・プロジェクト（1955～1961年）によるソウル大学教員のアメ

リカ留学をはじめ海外へ送り出された留学生が学術研究および科学技術の発展に大きな役割を果たしてきた。少し古くなるが2005年の調査では、韓国の大学で同年下半期に採用された教員の36.4%が海外で博士学位を取得しており、同じく24.7%がアメリカで博士学位を取得していたという（中大新聞、2018年1月14日アクセス）。特に韓国最高峰のソウル大学においては海外学位所持者の割合が高く、全教員の62.3%が海外で博士学位を取得しており、同じく50.5%がアメリカで博士学位を取得していたという（メディアオヌル、2018年1月14日アクセス）。このようにわが国とは比較にならないほど²韓国の大学教員には海外学位の所持者が多く、英語を使った授業の拡大³など近年急速に進む高等教育の国際化もそうした人材によって支えられている部分が少なくないと考えられる。

2. 留学生送り出しの一般的状況

次に、高等教育段階における留学生送り出しの一般的状況について見てみよう。図1は韓国におけるここ10年間の送り出し留学生数と受け入れ留学生数の推移を示したものである。韓国政府は2000年代以降「Study Korea Project」（2004年）をはじめとする積極的な留学生受け入れ政策を推進しており、その結果2017年の受け入れ留学生数は12万3,858名（うち学位課程在籍者は7万2,032名）に達している。一方、同年の送り出し留学生数は23万9,824名（うち学位課程在籍者は14万2,886名）であった（教育部ウェブサイト、2018年1月14日アクセス）。近年受け入れ留学生数との差は縮まりつつあるとはいえ、依然として2倍以上送り出し留学生数のほうが多いのである。

図1. 送り出し留学生数および受け入れ留学生数の推移



注：留学生数には学位課程在籍者および語学研修生等が含まれる。

出所：教育部ウェブサイト、2018年1月14日アクセスより筆者が作成。

こうした「輸出超過」現象には、国内の学位よりも海外（特に欧米）の学位を高く評価する韓国社会の風潮や韓国人の英語教育熱の高さ、そして韓国人学生の強い「外向き志向」などが影響していると考えられる。近年「内向き志向」の学生が増えているといわれるわが国とは対照的といえよう。しかしながら、当の韓国にとってこうした留学の「輸出超過」現象は必ずしも歓迎すべきものとはいえない。なぜなら、大量の留学生送り出しは貴重な外貨や国内資産の流出をとまなうからである。今、留学を教育サービスに関する国際貿易として捉えた場合、初等・中等・高等教育段階の留学を合算した韓国の輸出入収支⁴は毎年大幅な赤字となっている。2016年の赤字額は実に33億9,580万ドルに上る（eナラ指標ウェブサイト、2018年1月14日アクセス）。

なお、韓国では法令上、留学は国費留学、国費研修、私費留学（原語は「自費留学」）の3つに分けられる（「国外留学に関する規定」（大統領令））。実際には送り出し留学生のほとんどが私費留学生で占められており、2017年の国費留学・研修の募集定員はわずか40名に過ぎない⁵（教育部国立国際教育院、2017年a、2017年b）。しかし国費留学生の少なさは必ずしも韓国政府が国費留学政策に対して消極的ということの意味しない。むしろ、多数の私費留学生の存在を前提として「選択と集中の原理」に基づき、「浅く広く」ではなく「狭く手厚く」支援すべく国費留学制度が設計されていると見るのが妥当である。

たとえば表1は4年制大学卒業者を対象とした国費留学生の選抜分野と定員を示したものであるが、これを見ると国家戦略に則り「地域研究」、「基礎学問研究」、「未来成長動力研究」の3分野に的を絞って少数精鋭の国費留学生を選抜する内容になっていることが分かる。私費留学生が多いアメリカやイギリスについては地域研究分野の募集をおこなわないという点にも、私費留学生の多さを前提とした「選択と集中の原理」が垣間見える。さらに一種のアファーマティブ・アクションとして、2010年度から生活保護受給資格者等を対象とした低所得層特別選考を一般選考とは別枠で設けている点も興味深い⁶。韓国の将来を担うことが期待される国費留学生には手厚い支援が約束されており、たとえば日本に留学する場合、往復航空賃とは別に一般選考採用者には年額318万1,810円、低所得層特別選考採用者には年額439万6,100円の奨学金が最長3年間支給される⁷（教育部国立国際教育院、2017年a、8頁）。

表 1. 国費留学生（4年制大学卒業生対象）の選抜分野および定員（2017年度）

選考	選抜分野			定員	留学先国家
	研究分野	専攻分野	細部専攻分野		
一般選考	地域研究	個別国家および地域研究	人文学、政治、経済、社会、文化、教育など当該留学先の地域に関連する研究の諸分野 ※私費留学の機会が多いアメリカ合衆国、イギリスなどは除く	1名	アジア国家
			2名	ロシア・CIS国家・ヨーロッパ（イギリスは除く）	
			1名	中東・アフリカ・アメリカ大陸（アメリカ合衆国は除く）・オセアニア	
		国家間比較史学研究	国家間比較史学研究の諸分野	2名 （留学先国家ごとの採用者数の制限なし）	中国・日本・アメリカ合衆国・ロシア
	基礎学問研究	人文科学	哲学、文学、歴史など人文科学の諸分野	3名	—
		社会科学	社会学、法学、政治学、経済学など社会科学の諸分野	3名	
		自然科学	物理学、化学、生物学、天文学など自然科学の諸分野	3名	
	未来成長動力研究	未来新産業	知能型ロボット、ウェアラブルスマート機器、実感型コンテンツ、スマートバイオ生産システム、バーチャル訓練システムなど未来新産業の諸分野	2名	留学先国家の制限なし
		注力産業	スマート自動車、深海底海洋プラント、5G移動通信、高機能無人機など注力産業の諸分野	2名	
		公共福祉・エネルギー産業	オーダーメイド型健康ケア、新再生エネルギーハイブリッドシステム、災害安全管理スマートシステム、直流送電システム、超小型発電システム、超臨界CO2発電など公共福祉・エネルギー産業の諸分野	2名	
		基盤産業	知能型半導体、融複合素材、知能型IoT、ビッグデータ、先端素材加工システムなど基盤産業の諸分野	2名	
	一般選考小計			23名	—
低所得層特別選考	一般選考の全分野			10名	一般選考と同様
	合計			33名	—

- ・「個別国家および地域研究」の「中東・アフリカ」への志願者はイギリスのロンドン大学（SOAS）に留学可能。
- ・専攻分野のうち細部専攻分野に類似した分野に志願することができる。
- ・分野ごとの採用者数が定員に達しない場合も追加選抜は実施しない。

出所：教育部国立国際教育院、2017年a、1頁。

3. 留学先の変化と留学生数の変動

それでは韓国の学生たちはどのような国に留学しているのでしょうか。留学先国家別の送り出し留学生数上位10カ国を示したものが表2である。伝統的な留学先である北米やヨーロッパ、日本に混じって中国やフィリピンといった国がトップ10内に入っていることが分かる。これら「新しい」留学先への留学生数増加が送り出し留学生数全体を押し上げているのである。

表2. 留学先国家別の送り出し留学生数（2017年時点）

順位	国名	留学生数（名）	うち学位課程在籍者数（名）	全留学生数に占める学位課程在籍者の割合
1	中国	73,240	23,598	32.2%
2	アメリカ	61,007	49,308	80.8%
3	オーストラリア	16,770	13,691	81.6%
4	日本	15,457	11,385	73.7%
5	フィリピン	13,257	13,257	100.0%
6	イギリス	11,065	4,610	41.7%
7	カナダ	8,735	6,229	71.3%
8	フランス	6,655	2,055	30.9%
9	ドイツ	6,087	4,460	73.3%
10	ニュージーランド	6,060	4,195	69.2%
—	その他	21,491	10,098	47.0%
	合計	239,824	142,886	59.6%

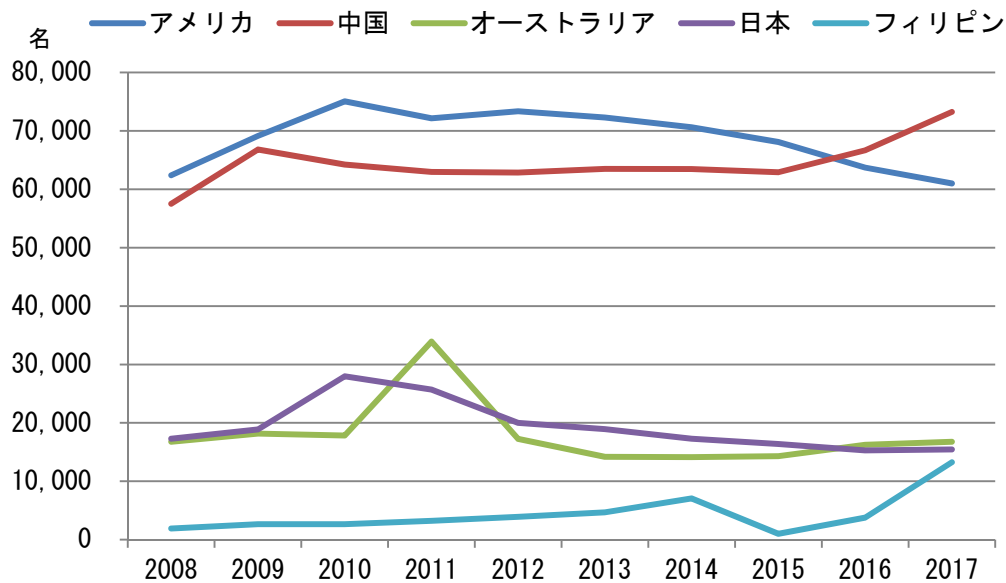
注：学位課程在籍者以外の留学生には語学研修生、交換留学生、短期研修生、進修生、非学位課程在籍者が含まれる。

出所：教育部ウェブサイト、2018年1月14日アクセスより筆者が作成。

特に、学位課程在籍者の占める割合が低いとはいえ、中国がアメリカを抜いて韓国人学生の留学先1位になったことは、国際社会における中国のプレゼンス増大を印象付けるとともに、韓国の留学生送り出しにおける「アメリカ一強・英語一強」状態の終焉を予感させる。実は受け入れ留学生数においても中国出身者は圧倒的な1位であり、2017年時点で中国出身者は受け入れ留学生数全体の実に55.1%を占めている（教育部ウェブサイト、2018年1月14日アクセス）。韓国にとって中国は今や最大の貿易相手であり⁸、地理的な近さと経済的つながりの強さを背景に、留学生の送り出し・受け入れ双方において韓中両国は密接な関係を持つようになっている。このことは両国の国際人材の交流を加速させる効果を持つと考えられる。

次に留学生数の推移を見てみよう。図2は留学先上位5カ国への送り出し留学生数の推移を示したものである。アメリカや日本といった伝統的な留学先への留学生数が2010年を境に減少傾向へ転じている一方、中国やフィリピンへの留学生数は2015年頃から急激な伸びを示していることが分かる。オーストラリアについては以前ほどの人気はなくなったといえるが、2013年に底をついたあとは留学生数が微増傾向にある。

図2. 留学先上位5カ国への送り出し留学生数の推移



出所：教育部ウェブサイト、2018年1月14日アクセスより筆者が作成。

なお、先に示した図1で2012年から2015年まで送り出し留学生の全体数が減少していたが、その理由としては就職の際に海外の学位や留学経験が以前ほどの大きなアドバンテージにならなくなったことと、韓国の景気悪化によって相対的に留学費用の負担感が増したことが挙げられるという（国民日報、2018年1月14日アクセス）。一方で2016年から送り出し留学生数が再び増加に転じていたが、その理由としては国際社会における政治・経済的プレゼンスを急速に高めつつあり韓国にとって最大の貿易相手でもある中国への留学が急増したことと、アメリカに比べて安価で英語での教育を受けられるフィリピン等への留学が増加したことが影響しているという（ファイナンシャルニュース、2018年1月14日アクセス）。このように私費留学生がほとんどを占める韓国における留学生送り出しの趨勢は、留学の費用対効果を最大化しようとする個人の利益獲得戦略に影響を受けてダイナミックに変動する点が特徴といえよう。

まとめ

以上、2010年代以降を中心に韓国における留学生送り出しの現況を見てきた。韓国が海外に送り出してきた留学生はこれまで同国の学術研究および科学技術の発展に大きく寄与してきたし、グローバル化が加速するこれからの時代において彼／彼女たちの果たす役割はさらにその重要性を増すであろう。一方で、2010年代以降の韓国における留学生送り出しの趨勢には1つの変化が見られた。それは、伝統的な留学先であった欧米先進諸国や日本への留学生数が減少傾向にある一方、中国やフィリピンなど「新しい」留学先が台頭してきているという点であった。その背景には対中関係の重要性が増し

たことや長引く不況によって留学費用に対する負担感が増したことがあった。2016年に中国がアメリカを逆転して韓国人学生の留学先1位になったことは、韓国の留学生送り出しにおける「アメリカ強・英語一強」状態の終焉を予感させる象徴的な出来事であった。しかし一方で、それは留学における費用対効果の最大化という個人の利益獲得戦略の影響を強く受けた結果である点にも留意すべきであろう。留学生送り出しの趨勢が個人の利益獲得戦略に大きく左右されるということはすなわち、国家戦略として実施されている国費留学を除けば、将来的に中国やアメリカ、あるいはその他の国々への留学の費用対効果が変化すれば、現在の状況が容易に変わり得ることを示唆しているからである。

地政学上および産業構造上、韓国はアメリカ、中国、ロシア、日本といった周辺の大国の影響を強く受けざるを得ない。こうした中、韓国における留学生の送り出しは、国家発展の中核を担う高度人材の養成という国家戦略とともに、留学における費用対効果の最大化という個人の利益獲得戦略ともあいまって、今後も変化し続けていくものと予想される。

参考・引用文献

<日本語>

呉嫻『日中両国における大学教授職の国際化に関する比較研究』広島大学大学院教育学研究科博士学位論文、2016年。

佐藤由利子「韓国における頭脳獲得・還流政策と留学生政策」『大学論集』第47集、広島大学高等教育研究開発センター、2015年、105～120頁。

鄭圭永「韓国高等教育の国際化と留学生施策」『留学交流』2006年10月号、2006年、18～21頁。

嶋内佐絵『東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換—大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較—』東信堂、2016年。

塚田亜弥子「韓国における外国人留学生受入の質向上に関する分析—外国人留学生誘致・管理力量認証制に着目して—」『比較教育学研究』第54号、2017年、66～87頁。

長島万里子「韓国の留学生政策とその変遷」『留学交流』2011年4月号、
http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/marikonagashima.pdf。

宮田実訳「減少し始めた韓国人のアメリカ留学—『高等教育クロニクル』の記事より—」『大阪産業大学論集（人文・社会科学編）』第23巻、2015年、251～256頁。

<韓国語>

教育部「低所得層碩・博士国費留学で教育希望のはしご強化—2017年低所得層／技術・技能人国費留学生追加選抜公告—」教育部報道資料、2017年7月26日付。

教育部、韓国教育開発院『2017整理された教育統計』韓国教育開発院、2017年。

教育部国立国際教育院「2017年国費留学生選抜試験公告」教育部国立国際教育院、2017年a。

教育部国立国際教育院「2017年技術・技能人国費留学（研修）生選抜試験公告」教育部国立国際教育院、2017年b。

ソン・ミジョン「国費留学制度—推進現況および主要内容を中心に—」『The HRD Review』第20巻第5号、韓国職業能力開発院、2017年、76～81頁。

<英語>

Kim, E. G. "English Medium Instruction in Korean Higher Education: Challenges and Future Directions." In Fenton-Smith, B., Humphreys, P. and Walkinshaw, I. (Eds.) *English Medium Instruction in Higher Education in Asia-Pacific: From Policy to Pedagogy*. Cham, Switzerland: Springer, 2017, pp. 53-69.

<ウェブ（韓国語）>

eナラ指標ウェブサイト、<http://www.index.go.kr/>。

韓国貿易協会貿易統計サイト、<http://stat.kita.net/>。

教育部ウェブサイト、<http://www.moe.go.kr/>。

国民日報（「外国学位冷や飯—海外にいく留学生3年間減少—」2014年12月8日付）、
<http://news.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=0922872367&code=11131300&cp=nv>。

国家法令情報センターウェブサイト、<http://www.law.go.kr/>。

中大新聞（「海外博士学位なく悲しい予備教授たちよ！」2006年5月5日付）、
<http://news.cauon.net/news/articleView.html?idxno=10658>。

ファイナンシャルニュース（「海外留学生5年ぶりに増えた—フィリピン・オーストラリア『急浮上』—」2016年11月22日付）、
<http://www.fnnews.com/news/201611221111226441>。

メディアオヌル（「ソウル大教授50.5%が『アメリカ博士』」2005年1月17日付）、
<http://www.mediatoday.co.kr/?mod=news&act=articleView&idxno=33838>。

注

1 なお、現在も芸術・スポーツや科学技術など特定分野で優れた才能があると認められた場合や特別支援教育を受ける場合など限られたケースを除き、義務教育（初等学校および中学校）段階における私費留学は法的に認められていない（「国外留学に関する規定」（大統領令）第5条）。しかし実際に罰則が科されることはほとんどないため義務教育段階での早期留学者も多く、近年下火になりつつあるものの2016年には6,496名の初・中学生が私費留学している（教育部、韓国教育開発院、2017

- 年、29頁)。
- 2 なお2011～2012年に実施されたサンプル調査によれば、日本の大学教員のうち海外の学位を所持していた者は5.7%であった(呉嫻、2016年、16～17頁)。
 - 3 ある調査によれば2010年時点でソウル市所在の大学では全授業の20～40%が英語を使っておこなわれていたという。また、4万人の学部生を対象とした別の調査では、2014年に彼／彼女らが履修した専門教育課程の授業のうち約15%は英語を使った授業だったという。韓国で2000年代半ば以降英語を使った授業が拡大した背景としては、留学生誘致をはじめとする政府による高等教育のグローバル化政策の推進や、有力メディアの大学ランキングにおいて英語を使った授業をどれだけ実施しているかが重要な評価指標とされたことがあるという(Kim, 2017, pp. 54-57)。
 - 4 受け入れ留学生が韓国国内で使う経費総額(輸出)から、送り出し留学生が留学先で使う経費総額(輸入)を引いた金額。
 - 5 現在、韓国の国費留学生派遣制度には大きく分けて、①4年制大学卒業者を対象とする「国費留学」と、②職業系高校を卒業したのち中小企業で3～5年在職した者を対象とする「技術・技能人国費留学・研修」の2つが存在する。ここで示した数値は前者33名と後者7名の募集定員を合算したものである。
 - 6 なお、一般選考の競争倍率は9～18倍に上る一方、低所得層特別選抜では募集定員と応募者の数がほぼ同じ状況(≒競争率1倍)であるといい(ソン・ミジョン、2017年、79頁)、現時点では所期の成果を十分におさめることができていないといえる。
 - 7 ちなみにアメリカに留学する場合、一般選考採用者には年額3万5,000ドル、低所得層特別選考採用者には年額5万ドルが最長2年間支給される。国費留学奨学金の最長支給期間は原則3年間であるが、アメリカやイギリス、カナダなど人気が高く私費留学生が多い国・地域に留学する場合の最長支給期間は2年間であり、他の国・地域に留学する場合より1年短くなっている(教育部国立国際教育院、2017年a、8頁)。
 - 8 2017年時点で韓国の輸出総額は5,737億1,700万ドルであり、このうち対中国輸出額は1,421億1,500万ドル(対輸出総額24.8%)であった。この額は2位アメリカの686億1,100万ドルをダブルスコアで引き離すものである(韓国貿易協会貿易統計サイト、2018年1月22日アクセス)。対中国輸入額も1位の978億5,700万ドルで、2位アメリカの2倍近くとなっている。

【海外留学レポート】

私のアナザースカイ

-スイス、ベルン-

My Another Sky: Switzerland, Bern

慶應義塾大学 神谷 真由

KAMIYA Mayu

(Keio University)

キーワード：スイス留学、ドイツ語圏、安全なヨーロッパ

どこが私のアナザースカイ？

私は、高校生の時にニュージーランドに留学をした経験があったため、大学でも再度留学をしたいと思っていた。そして、その際には、英語圏ではない国で、現地の言葉を新たに習得したいと考えていた。また、将来は漠然と海外に住んでみたいという小さい頃からの夢があったため、自分が長く住みたいと思える国を探すというのも今回の留学の目標の一つにあった。そこで、大学の提携校を調べていく際、ヨーロッパの中で安全そうな国で、英語圏ではないものの、授業は英語で受けられる国を探していたところ、見つかったのがスイスだった。スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4か国語を公用語としており、言語学に関心のあった私には、思いもよらず興味が凝縮した国だったのだ。それまでに行ったことがなかったこの国は、私にとって新たな冒険になると思い、未知の国スイスを留学先として選ぶことにした。このように決めたスイスが、今現在私にとってずっと住みたいと思える国になろうとは、この時は全く想像もしていなかった。

ベルンってどこにあるの

スイスと聞くとチューリッヒやジュネーブを思い浮かべる人が多いかもしれない。実際に世界への玄関口となる国際空港はその両都市にあり、人口の多さも一位と二位である。しかし首都はベルンという、少しこぢんまりとして落ち着いた都市にある。まず日本からはチューリッヒ空港へと飛び、そこからベルンまでは電車で1時間ほど揺られると着くことができる。ベルンの駅を出て初めて街並みを見たとき、こんなにも美しく素敵な場所に1年間も暮らせるのかと、息を飲むほど感動し興奮した

ことは今でも忘れられない。街を歩いていても日本人を見かけることはほぼなく、日本人の代表にでもなった気分をベルンはもたらしてくれた。電車で大荷物を抱えていた私を心配して、自ら荷物を持つのを手伝ってくれたりする人がいたり、人も優しく、さすがはホスピタリティで有名な国である。また、特にスイスらしさを感じたのは、鉄道の窓口でシステムトラブルによってチケットが上手く買えなかった際、お詫びにチョコレートをもたらした時である。チョコレートが有名だとは聞いていたものの、チョコレートで解決しようとするスイス人のその姿勢は、なんだかほのぼのとさせられる気持ちがあった。そしてスイスのチョコレートは例え一番安いものであっても、なめらかな口通りで、一度食べてしまうと他の国のチョコレートは食べられなくなるほど美味なのである。さらに、時計でも名高いスイスは、どの都市に行っても時計塔があり、鉄道の時間も時刻表通りぴったりに発車する。これは、日本人の私にとっては非常に暮らしやすい要因の一つと言える。



Zurich



Bern

ヨーロッパの日本人

渡航前、分からないことがあるとすぐにベルン大学の留学生担当者の方にメールを書いて質問をしていたが、常に迅速丁寧で、詳細な返信をくれた。ヨーロッパとの連絡はたいていメールを送っても返事が遅いか、もはや来ないという話をよく耳にしたことがあったが、スイスは良い意味で例外のようだ。また、現地に着き、スイス人はシャイで割と内向的な人が多いという話を多く聞くようになった。実際に、初対面で自らぐいぐいと話しかけてくる人はあまり見かけない。このように日本人と似ている点の多いスイス人との交流は、私に初めて来た異国の地のような感情をあまり抱かせなかった。大学の授業が始まる前には、留学生向けにキャンパス案内や、シティーツアー、履修登録についての説明などをするオリエンテーションウィークが設けられており、ベルンの隣の州への day trip まで用意されていた。また、留学生の支援団体によってもたびたびイベントが開催されるため、留学生同士が親しくなるのは容易い。こうした手厚いサポートもどこか日本を彷彿とさせるものがあったように思う。

アルプスとの共存生活

私は大学から紹介を受けた学生寮に住んでいる。大学へは電車かトラムに乗らないと着けないが、それもまたある意味「普通の生活」を体験できるいい機会だと思っている。私の部屋は17階にあるため、自室のバルコニーからは晴れているとアルプスの山々が見え、とてつもなく美しい景色が一望できる。キッチン、トイレ、シャワーは全て共同で、同じフロアには様々な国籍の男女が10人ほど住んでいる。キッチンにある道具はフロアごとに異なるため、私のフロアには電子レンジがなく、少し不便な思いをしたが、炊飯器はあったため、ある意味ラッキーではあった。私の部屋は洗面所のスペースを2人で使用しているため、隣に住んでいる中国人の博士課程の学生はルームメイトのような存在だ。いつでも話し相手が家に帰った時にいてくれるのは心強く、相談事をしたり、一緒に料理を作ったり、第二の姉のような存在に出会えたことに非常に感謝をしている。現地人だけでなく、世界中から集まる人々と出会える機会が得られることもまた留学の醍醐味なのではないだろうか。



Luzern



United Nations in Geneva

はじめまして、言語大国

スイスが多言語国家だということを圧倒的に感じさせられたのは、電車でフランス語を話す夫婦をフランス人だと勝手に思い込んでいた時のことだった。車掌さんがチケットチェックにやってきた際、スイス人が持っている電車のカードを持ち、さらに行き先をジュネーブだと伝えていたのが聞こえ、彼らはスイス人なのだと判明した。同じ国民でも住む地域で言語が変わるゆえに、言語だけではどこの国の人か一見、見当がつかないということに衝撃を受けた。しかし、よくよくもう少しスイスの言語を知ってから考えてみると、フランスで話されているフランス語とスイスで話されているフランス語は少し異なっているため、スイス人からすればしっかりと認識が出来るとのことだった。スイスドイツ語においては、現地に来る前から標準ドイツ語とは大幅に異なるために、勉強していても無駄だとすら言われていた。実際にドイツ人に聞いてみるとスイス人のドイツ語は理解できないと答える人が大半で、スイスドイツ語も州によって方言が異なっているために、すぐにどの地域出身かをスイ

ス人同士は理解しあえるとのことだった。そしてベルンはドイツ語圏とフランス語圏の境目に位置しているために、フランス語の言葉が方言の一部に入っていることも多い。「ありがとう」を「Danke」ではなく、「Merci」と使用するのがベルン風なのである。しかし普段の生活を行う上で、ドイツ語圏の人々は英語を話せる場合が多く、意外とドイツ語が話せなくても不便には感じない。一方でフランス語圏に行った際には、一切英語が通じない時があり、スイス国内でも住む場所によって現地の語学の必要度は異なっている。このようにスイスでは、少し電車に乗っただけで言語が異なる地域に行くことができ、建物や人の雰囲気も変わるため、まるで一つの国にいるとは感じさせないほどに異文化が共存し満ち溢れているのだ。だからこそ、小さい国ではあるが、一向に退屈をしない魅力的な国なのかもしれない。

宇宙一の物価の利点

スイスは世界の中でも有数の物価の高さを誇っていることを忘れてはいけない。外食をすれば一皿2,000円はくだらないのだ。スイス人の友人に物価の高さは気にならないのかを尋ねたところ、その分所得も高いため問題ないと言われた。つまり、外国人に対しては大変な暮らしだが、スイスで生活を営んでいる分には大して困らないのだ。コンビニのアルバイトですら時給3,000円くらいにもなると聞いた時には驚いたものだ。だからこそ、スイス人は海外旅行に行くのが好きなのかもしれない。電車賃は特に高いため、国内の移動費が、海外への格安航空券よりも高いこともざらにある。また一步海外に出てしまえば、どこに行っても安く感じるのだという。さらにスイスはヨーロッパの内陸部に位置しており、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリア、リヒテンシュタインと国境を接している。私の住んでいるベルンから、イタリアのミラノまでは直通電車でたったの3時間で着いてしまうし、フランスのパリまでも4時間という驚異的な近さである。ベルン駅では、ドイツの列車や、イタリアの列車を見かけることもしばしばあり、いとも簡単に列車で国境を渡って海外へと足を延ばすことができるのだ。この感覚が日本という島国で生まれ育った私からすると、とんでもなく信じられないことであり、なおかつ私を大変魅了する点でもある。



Cheese fondue



Duomo in Milan

ヒーローがたくさん

スイスについてもう一つ挙げられるのは、スイスは徴兵制がある国の1つであるということだ。スイスの治安は基本的には良いのだが、永世中立国として自国のことは自分で守らなくてはならない。全方位を陸続きで隣国と共有しているということは、利点だけでなく、万が一の際に対しても常に用意周到である必要があるのだ。スイス人男性は半年間軍に入らなくてはならないが、週末は自宅に帰ることができる。しかし週末帰宅する際にも彼らは銃を持ち歩くことを許されているため、初めて街で銃を持ち歩く彼らを見た際に、少し恐怖に似た感情を抱いた。しかし、この徴兵制は軍に行く代わりに、社会奉仕活動に変えることもできるようだ。とはいえ、多くの友人たちが軍を経験しているのかと思うと、日本とかけ離れた文化に衝撃を覚える一方で、非常に頼もしくも思う。家庭に銃を保持することも当たり前らしく、友人の家に訪問した際、実際に銃を持たせてもらったが、一丁4、5kgの重さで、想像以上にずっしりとしていた。スイスは日本並みに治安が良く、特段気を張らずとも生活ができるが、その裏には彼らの努力があることを忘れてはいけないのだということを痛感させられた。

言いたいことは口に出してみる

日本では、相手の気持ちを推し量ることが美德とされる風潮があるように思う。私ももちろん日本人として、そういった技能は無意識のうちにある程度は染み付いている。しかしながら、一步海外へと足を踏み入れた瞬間、自分で意識的にその考えを変えようと心がけている。思ったことは口に出し、言葉で相手に伝えてみないことには何も始まらない。そして言ってみると意外と思いは叶ったりもするものである。チャンスは何度もの失敗の上にあるものだというのを、スイス人の友人を見ていてよく感じさせられる。願いが叶わなくてもそれを恥じる必要はなく、伝えてみるということにまず一

つの成長があるのではないか。そしてチャンスは掴めればラッキーな話で、掴めた時にはそのチャンスを最大限生かせるよう自分で努力をすればよい。何事も他人のアクションを待っているのは遅いのである。スイスに来てから、物価の高さに恐れをなして、大学の留学生担当者の方に、今からでも応募できる奨学金はないのかと問い合わせたところ、スイスの財団を一つ紹介してくれた。その財団に連絡をとってみると、審査にすらかけてもらえるか分からないが、応募してみることは可能だと言われたため、必死に必要な書類をかき集め、応募してみたところ、奇跡的に奨学金を受給するチャンスを掴むことができた。その時、やはり何でも思ったことは相談してみるべきなのだということを学んだ。また、連邦議事堂に見学に行った際、見学ツアーのみんなが先に外に出て行ってしまっても、友人が写真を撮りたいと後に残り、警備員さんに写真を撮ってもらえるか尋ねたところ、快く承諾してくれ、尋ねてみることで一生の思い出にもなるのだということを知った。迷った時には、少し図々しいと思われたとしても他人の目がある程度は気にしない心を持つとすること、もしくは図々しいだなんて思われなくてもいいのだから、思ったことは口に出してみようとするのを心がけるようになった。これは帰国してもずっと忘れずにいたい私にとっての新たな教訓である。



Thun



Solothurn

やっと見つけた私のアナザースカイ

時間があるときにはスイスの国外へ飛び出し、どこか他に長く住みたいと思える場所がないかを探している。ヨーロッパには本物がすぐ手の届く範囲にあるという魅力がある。教科書で見た建物、ガイドブックに載っている名産品、全てが目の前に現れてくる。少し乗り物に乗ると、すぐに言語が異なり、通貨も異なる国に行くことができる。こうした体験はヨーロッパにいるからこそできる特権なのではないか。しかしながら、どこに行ったとしてもベルンに帰ってくるとほっとし、やはりこの地

が私にとって住みやすい土地だなという感覚を毎回覚える。旅行先では、高い建物や多くの人に圧倒され、テロの警戒のために立っている警察に少し居心地の悪さを感じ、スリも多いと聞くため、気も張っていなくてはならず、何かと気疲れすることが多いのだ。しかしベルンでは、高い建物も少なく、あっても連続してはいないため圧迫感を感じることはなく、スリなどの心配もさほどないため、非常にリラックスして生活ができる。少し郊外に行けばすぐに牛などの動物が出迎えてくれ、都市部に行けば必要なものは全て手に入り、旧市街は世界遺産にも登録されているほど美しく佇んでいる。このベルンの持つ魅惑的な味わいに私はすっかり虜になってしまった。「ベルン」とはドイツ語のクマという単語から来ており、ベルンの街には本物のクマが3頭実際に住んでいる。州の旗にもクマが描かれており、他のどの州の旗よりもチャーミングであると住んでいる人々が自負をしており、そういった愛郷心の強さにも惹かれる。ベルンドイツ語を理解することはまだできていないが、この言語の音を聞くだけで心地よく、なぜだか安心できる。留学の目標の一つであった、長く住みたいと思える場所を探すということは、ベルンを選んだ時点ですでに達成されていたのかもしれない。ベルンは私にとってかけがえのない運命的な出会いを果たした都市であり、これからも一生、いつでも帰ってきた時には「ただいま」と言える私のアナザースカイである。

デイドリーム

留学は期限付きである。特別な夢物語のような時間とも言える。正規の学生になれるわけではないが、旅行者とも違い、自分の住所を持って、ある程度は腰を据えて生活をしなくてはならない。しかし、無期限な生活でもないため、毎日が新鮮で、かつ留学生というプラチナカードを持っているおかげで様々なイベントごとにも参加でき、チャンスは無限大とも言える。ところが、ひとたび期限がくると夢から覚まされ、自分の普段の日常生活に戻らなくてはならないという厳しい条件付きだ。その夢の中で起きたことを夢のままにせず、現実の世界においてもその時の自分を思い出して何とか現実にしようと努力をするか、夢は夢だったとして、そっと胸の中にしまっておくかはその人次第である。私は高校生の時の留学では、その夢を帰国してから胸の奥にしまい込み、まるで何事もなかったかのように周囲に感じてもらえる努力をした。そうすることで日本に再び馴染もうとしたのだ。しかし、今回の留学を終えた時には、この夢物語をただの夢としてしまうのではなく、現実にあったことなのだとは何度でも噛み締められるように、スイスとの繋がりを強固なものにできるよう心がけたい。



Bern



A Swiss style of Christmas tree

【日本留学レポート】

日本での外国人の生活

My Quick Half a Year in Japan

山口大学元交換留学生 ジーギマンタス・マチュルスカス

Zygimantas Maciulskas

(Ex-exchange student, Yamaguchi University)

キーワード：日本留学、山口大学、リトアニア

私の母国はリトアニアです。リトアニアはとても小さい国で、人口は3百万人程です。そして、この国には日本人がほとんどいません。

そんな私が日本に興味を持った理由は、まず言葉と歴史に興味があったからです。また、私が日本語や日本について勉強を始めたころ、アジアに関連した仕事の需要が高まっていたことも理由でした。江戸時代の侍が出てくるような映画に惹かれ、日本の文化をより学びたいと思うようになっていきました。

日本に来る前には、日本人は本当に変わっていると思っていました。日本人にとって最も大切なことは、就職をして会社員になることだと思っていました。また、日本の都市はとても大きくて、人も多いですから、森があまりないだろうと思っていました。日本人の暮らし振りや日本の環境、日本にまつわる全部は、すべて灰色だと思っていました。しかし、私が間違っていました。

私が日本に住んだのは留学期間のたった半年間です。山口大学に留学し、日本語を勉強するためです。日本に着き、飛行機から降りたとき、本当に蒸し暑かったことを覚えています。私は一人で、かつ自分の日本語はまだ下手だったから、空港からドミトリーまでの旅路はちょっと難しかったです。電車の切符を買うことや乗り換えの仕方を知りませんでしたから、日本人に尋ねました。外国人が日本語で日本人に質問したから、彼らは驚いていました。キャンパスでも誰も知り合いがいなかったの、最初の日は厳しかったですが、初日に2人の友人と出会いました。彼らは、アパートをきれいに

するのを手伝ってくれました。彼らのうちの一人は、私を店へ連れて行って、私が掃除製品を買うのを手伝ってくれました。私は100円の店で安く物を買うことができず知らなかったのも、他のコンビニで大枚をはたきました。そして、リトアニアより日本のほうが食べ物の値段がかなり高いことを知りました。リトアニアで1キログラムのジャガイモが40セント（～45円）であるのに比べて、日本では、1個のジャガイモが33～64円です。そして、我々リトアニア人は、ジャガイモを使った料理を食べるのが大好きです。たとえば、ツェペリナイ (CEPELINAI)、ヴェーダライ (VEDARAI) とジャガイモ・パンケーキ。ジャガイモを使った食事を毎日食べるができなかったから、私は1袋10キログラムの米を買って、チキンと食べました。チキンが日本で最も安い肉だったからです。正直なところ、日本で暮らす間、私はあまりたくさんジャガイモを食べることができませんでした。他の製品（服と日用品のような）については、リトアニアとほとんど同じ価格でした。

交通費について話すと、日本の公共交通機関は、リトアニアと比較して、非常に高価です。日本での交通費は、リトアニアの4倍程で、とても高価でした。私は、食費よりも、交通費について一番出費したように思います。旅行をするためには、私は仕事を見つけなければなりません。それで、私は留学生のための学生アドバイザーにパートタイムの仕事について尋ねました。アドバイザーは私に2つ電話番号を伝え、連絡するように教えてくれました。しかし、当初はSIMカードを持っていなかったため、私は彼らに電話をすることができませんでした。私は私立の英会話学校の先生として、アルバイトをようやく得ましたが、先生としてこれまで働いたことがなかったため、それは難しかったです。最も難しかったのは、子供たちへの指導でした。私が外国人だったので、または、私の日本語が十分でなかったため、私の話がわからなかったのだと思います。最終的には、私は彼らが英語で単純な会話をできるようにすることができました。彼らが一部の英語をすでに知っていたこともあって、ティーンエイジャーや大人に教えるより簡単でした。仕事は大変でしたが、やり甲斐がありました。

私は、ようやく若干のお金をかせいで、旅行することができました。大阪、京都、奈良、東京と多くの他の都市に行きました。韓国にまで旅行しました。天気がちょうどよかったため、これまでにしたなかで最高の旅行でした。東京を除くと、私は奈良が最も好きでした。街並みはとても美しく、そして、どこに行っても多くの古い寺院で鹿の群れを見ました。鹿は、とても可愛かったです。私が彼らのうちの1匹にいくらかの鹿ビスケットを与えたため、彼らは至る所で私の後を追ってきました。奈良では、東大寺（世界最大の木造寺院）に行きました。こんなに大きいと聞いていなかったため、大変驚きました。また、私は幸運のために大仏をこすりました。その日の晩はお盆で、奈良県新公会堂に、私は行きました。1万の以上のランタンがあったと思います。

私は、日本を旅行するとき、常に地元のレストランとバーを探していました。最も美味しい飲物は梅酒でした、そして、焼酎が私にウォッカを思い出させたので、焼酎は好きではありませんでした。私はウォッカが嫌いですから。食物に関しては、最もおいしいものは、醤油 ラーメンとお好み焼きでした。私は一生、ラーメンを朝食、昼食と夕食に食べることができると思います。しかし、私はうどんは好きではありませんでした。

私の日本滞在の間に、日本人だけでなく、新しい友人に出会うことができました。彼らは、常に私をパーティーに招待してくれました。私は、日本の学生たちが日中、あまりお酒を飲まないことに非常に驚きました。しかし、私は勘違いしていました。パーティーは、夜、居酒屋とカラオケで開催されていました。驚くべきことに、日本人は非常に酔いやすいのに、頻繁に飲み会を開きます。私は、友人とカラオケへ行くのが本当に好きでした。たとえ喉が居酒屋の後ですでに痛かったとしても、我々はまだ歌って、笑いました。私が勉強する他にした活動の一つは、柔道部に行っていました。私はその部活のただ一人の外国人であったので、皆は驚いて、幸せでした。本当に楽しかった。それでも、たとえ友達たちが私と一緒にどこでも行ったとしても、しかし、私のガールフレンドがいなかったことだけは寂しかったです。

日本での留学生活は半年と短い間でしたが、この経験は私に日本についての多くの新しい知識を与えてくれました。また、私の日本語は、非常によくなりました。留学が終わる頃には、日本語で会話し、理解できるようになっていました。週に6回の日本語のレッスンと、柔道部でのクラブ活動がたいへん助けになったと思います。また日本に戻り、流暢に日本語を話すことができる日を楽しみにしています。日本に住んだ経験は、大幅に私の世界を広げてくれました。



奈良 東大寺



東京 新宿

次号予告
ウェブマガジン『留学交流』3月号
特集「外国人留学生のための就職とフォローアップ」
留学生のキャリア支援、元留学生会の活動（予定）

ウェブマガジン『留学交流』 2月号

Vol. 83

平成30年2月13日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

（編集部）留学情報課

東京都江東区青海 2-2-1（〒135-8630）

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス ij@jasso.go.jp

編集後記

本号では、「日本人学生の海外留学促進」と題し、日本人学生の異文化間友人関係形成について考察し、学部での東南アジア留学必須の試み、海外感染症危機管理の事例を取り上げております。

また、海外の教育事情は韓国における留学生送り出しを、海外留学レポートではスイス留学、そして、リトアニアからの日本留学の体験をご紹介します。

本号が、日本人学生の留学支援に携わるみなさまの参考となることを願っています。

本誌へのご意見、ご感想は、上記Eメールアドレスまでお願いいたします。 （編集部）

Web Magazine “Ryugakukoryu”(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)